
韓東勲、釜山北区甲 選挙前後100日（2026 年3月26日-7月3日）の記録

キム・ギョンジン

kimkj.com

目次

2026年3月26日から7月3日まで、除名後の春、釜山北区甲補欠選挙、無所属での当選、国会での最初の法案までを追います。

1. プロローグ 住所一行

第1部 党の外の時間

2. 第1章 除名後の春

3. 第2章 万徳に家を構えました

第2部 万徳の住民

4. 第3章 亀浦市場の朝

第2部 万徳の住民

5. 第4章 三人の候補、一つの選挙区

第3部 6月3日の夜

6. 第5章 路地の13日間

7. 第6章 明け方の1,392票

第4部 国会に戻ってきた日々

8. 第7章 戻ってきた場所

第4部 国会に戻った日々

9. 第8章 一枚の投票用紙の重み

第5部 議員の最初の夏

10. 第9章 工場と法の問い

11. 第10章 制服と電気料金

12. エピローグ 百日後の問い

13. ご支援のご案内

プロローグ 住所一行

2026年4月14日

釜山北区萬徳2洞の行政福祉センター。窓口には1枚の転入届が置かれた。2026年4月14日火曜日、春が深まりつつある頃であった。行政福祉センターは住民登録謄本を交付したり各種届出を行ったりする、地域の暮らしを支える小さな役所である。こうした窓口の前に立つ人々は、それぞれ新しい暮らし、新しい学校、新しい職場といった事情を抱えてやってくる。

転入届は引っ越してきた人が新しい住所を国の帳簿に登録する手続きであり、誰もが引越しをすれば提出するありふれた1枚の書類である。しかし、この日の書類は間もなく全国ニュースとなった。届出人の名前が韓東勲だったからである。

2か月前の1月29日、国民の力はかつて党を率いたこの人物を除名した。除名とは党員名簿から名前を消し、党の外へ追い出す決定である。政治家にとって政党とは名札であり、垣根である。公認を与え、選挙を共に戦う組織を付け、その発言に重みを持たせてくれる。法務部長官と国民の力代表を務めた政治家がその名札を失い、どの党にも所属しない人物となった。

再び選挙に出るには、どの党の名も借りられぬまま無所属で立たねばなりません。言葉ひとつ、歩みひとつの重みを、ただ一人で背負わねばならぬ立場でした。党の外で春を迎えた人がこの日、釜山北区の市民窓口の前に立ち、この日から彼の住民登録上の住所は釜山北区萬徳となりました。ソウル政治の真ん中で呼ばれていた名前が、釜山の路地の住所一行として記される日でした。

届出を終えた彼は記者たちの前に立ち、その日Facebookにこう綴った。「釜山から『保守再建の東南風』を巻き起こします。最後まで釜山北区で政治を行います。」釜山はソウルから見て東南に位置する。東南の沿岸都市から風を起こし、倒れかけた保守政治を再び立て直すという意図であつたろう。保守再建は全国に向けた言葉であり、釜山北区で政治を行うという決意は一つの地域に向けた約束である。

全国政治家と地域の住民、彼がなろうとする二つの姿が二つの文章の中に重なっていた。同日に投稿された別の文章は、語り口がより静かだった。「萬徳の住民、韓東勲です。この美しい場所で、最後まで共にいきます。」ソウルの政治的攻防にも、彼は釜山から答えた。検察官一人を大勢で追い詰めていると見た彼は、「当時法務部長官だった私をお呼びください。釜山からいつでも上がっていきます」と書き記した。

「上がっていく」という一言に、彼の足元がどこにあるかが込められていた。

歓迎はパン一つで訪れた。その日彼のアカウントには、萬徳の近隣住民から塩パンを贈られたという短い文章が投稿された。彼はパンを手渡した人物を「同僚市民」と呼んだ。疑念は言葉一つで訪れた。彼の投稿によれば、共に民主党の全載秀議員はこの転入を「空き巣」と呼んだ。主が去って空いた家を狙って入ってきたという意味である。

彼は「釜山北区は『市民の家』であり『政治家の家』ではありません」と受け返した。選挙の時だけ地域を訪れる政治家を何度も経験してきた有権者なら、抱くのも無理はない疑念であったろう。見知らぬ有名人を迎える地域の思いが一つであったはずはない。

除名された政治家の前には、いくつもの道があったはずだ。ソウルにとどまり機会を待つこともできたし、政治から一歩身を引くこともできた。彼は釜山へ身移す道を選んだ。言葉はいつでも変えられるが、住民登録は記録として残る。退路を自ら断った選択に見える。転入届は半日もあれば終わるが、その書類1枚を提出すると決意するまでの時間は、それほど短くはなかったはずである。

翌日、彼は「私の最初の選挙です。釜山で最初から最後まで行きます」と書き記した。長官や党代表を務めたとはいえ、有権者の前に己の名前一つを掲げて立つ選挙は、53歳にして初めてのことであった。

1か月後の5月15日、彼は無所属候補として登録した。6月3日に行われた釜山北区甲の国会議員補欠選挙で35,056票を得て当選した。得票率は42.96%であり、共に民主党の河政宇候補が33,664票で41.26%を得た。二人の差は1,392票、1.70パーセントポイントであった。

6月5日、彼は無所属議員として国会に初めて登院し、6月22日には初の法案である監査院法改正案を発議した。選挙を69日後に控えた3月26日から、選挙から30日が経過した7月3日まで、ちょうど100日間の出来事である。

転入届の住所一行は、一つの問いを残した。住所を移した者は住民となるのか、候補となるのか。届出を終えた彼が去った後も、窓口はいつものように次の来庁者を迎えたはずだ。塩パンを手渡す手と空き巣という言葉が同じ路地に共存していた春の日であった。答えは書類を提出した者ではなく、その書類を受け取った街が握っていた。

第1章 除名後の春

2026年3月26日～4月9日

2026年3月26日、韓東勲のFacebookに追悼の文章が投稿された。16年前、黄海で犠牲となった天安艦46勇士を偲ぶ文章であった。救助作業中に殉職した韓周浩准尉の名を特に挙げ、黄海を守り命を捧げた55人の勇士を大韓民国の英雄と記した。星となった英雄を記憶することにためらいがなく、傍らにいた英雄を礼遇することに不足のない国にならなければならないと述べた。

文章は端正であり、文章の結びは約束であった。「そのような大韓民国を作ります」。同じ文章で彼は、李在明政府になって初めて迎える「西海守護の日」のスローガンに英雄という言葉が見当たらないとし、兵士たちを英雄として記憶しない政府は正しい政府ではないと主張した。党の外にいても、その口調は公職者のものであった。

同日、同じアカウントに、全く毛色の異なる文章がもう一つ投稿された。一行目から荒々しかった。「ビビったな、ビビった」。国会で進行中の公訴取消国政調査について書いた文章であった。彼の記述によれば、この国政調査の与党幹事である共に民主党の朴省俊議員が、その日のラジオ番組で彼を証人として呼ぶことに線を引きした。すると彼は「与党議員190人が団体に私一人にビビって逃げ出す」くらいなら、なぜこのような国政調査を始めたのかと問い返した。

一人の人間が一日に投稿した二つの文章であった。一つは追悼辞の言葉遣いであり、一つは喧嘩場の言葉遣いであった。礼遇と品格の言語で国を語る前党代表が一方におり、与党に向かってビビったのかと叫ぶ党籍のない政治家が他方におった。どちらも同じ人間であった。2026年の春、韓東勲はその二つの声の間を行き来しながら暮らしていた。

当時、彼は党の外にいた。2か月前の1月29日、国民の力は前代表の韓東勲を除名した。検事、法務部長官、国民の力非常対策委員長、党代表。肩書はすべて過去形となり、残された現在形は己の名とFacebookアカウントであった。国会議席がないため会議場の発言台がなく、党がないため報道官も組織もなかった。除名から2か月、彼は議員でも長官でも候補でもなかった。

党の外で迎える最初の春であった。この2か月間を長く振り返る文章は、この半月間に1件もなかった。除名は他人の言葉に言い返す際、すれ違いざまに言及される程度であった。その处境を彼はこう記した。「私は除名された身一つであり、1対190なのに何が怖くて逃げ回っているのか」。190席の与党と党籍のない一人。彼はこの対峙をそのように数字で呼んだ。

この頃、彼が繰り広げた闘いの渦中に公訴取消国政調査があった。彼が添付して見せた民主党の国政調査要求書には、サンバンウル対北送金事件の捜査に法務部の指揮ラインが組織的に介入したという疑惑を調査すると記されていた。その捜査が進行していた時期の法務部長官が彼であった。

彼は共犯者たちが既に最高裁で有罪確定を受けた事件であるとし、この国政調査自体が李在明大統領の事件の公訴取消のための事前作業であると主張した。そうして自分を証人として呼ぶよう連

日要求した。証人宣誓を行い偽証処罰も甘受すると述べ、李在明大統領の逮捕同意案を通過させた長官であった自分こそが呼び出されるべき人間ではないかと問い返した。

彼の記述によれば、民主党側の拒絶理由は日によって異なっていた。捜査対象だからダメだという議員がおり、責任を負うことがないからダメだという議員がおり、彼が出席すれば修羅場になるという幹事がいた。国政調査特委委員長である徐瑛教議員が彼を捏造の「設計者」と呼び、秋美愛議員が「主犯」と呼んだとも彼は伝えた。そのように呼んでおきながら、いざ証人としては呼べない理由は何なのかと彼は問い詰めた。

彼を追い出した党もこの攻防に巻き込まれた。彼の伝えるところによれば、国民の力の羅卿瑗議員も当初は彼の証人出席が役に立たないのではないかという意向を示していた。4日後の3月31日、国民の力は彼を証人として申請した。その日、彼はこう記した。「本日、国民の力が私を公訴取消国調の証人として申請しました。感謝申し上げます」。自分を除名した党の決定に感謝を表す文章であった。

国民の力の徐範洙議員が、特委が100人を超える証人を採択しながら肝心の『主犯』と呼んでいた人物を除外しているのかと問い詰める文章を投稿すると、彼はその文章をシェアしたりもした。追い出した党と追い出された前代表が、一つの証人席を挟んでしばし同じ側に立った。党の外の政治家が国会会議場に入る道はその証人席だけであり、その扉さえも他人の手に委ねられていた。

3月26日から4月9日までの半月間、彼は50件を超える文章を投稿した。1件にとどまった日もあれば、10件に達した日もあった。そのうち20件以上が国政調査の攻防であった。相手は毎回変わったが、彼の要求は一度も変わらなかった。呼べ、ということであった。声をひそめた日は稀であった。4月6日には二人の議員を虚偽事実流布で告訴すると予告するまでに至った。

同じ要求を半月近く繰り返した文章からは、無念さと勝負欲が同時に読み取れる。自分を除外したまま自分に関する結論が出されるのを見過ごしはしないという態度に見える。党の外の政治家にとって沈黙は即ち忘れ去られる道だという感覚もあったであろう。闘いの真ん中に己の名を載せ続けること、それが身一つに残された方法のほぼ全てであったのだろう。

3月27日、闘いの文章の合間に一つの予告が挟まれていた。「明日土曜日の夜8時、SNLの新シーズン初回に私が出演します。楽しくご覧ください!」。検事と長官と党代表を歴任した人物が、コメディ番組の新シーズン初回に出演者として立つという知らせを本人が伝えたのである。番組は翌日の夜に放送された。

彼は「私は外にいるためまだ見ておりませんが、楽しんでいただけたなら幸いです」と記し、共演した俳優については自分がファンであったため尚更嬉しかったと述べた。感想の文章には映画『サタデー・ナイト・フィーバー』に挿入されていた昔の楽曲も添えられていた。そうでありながらも「バラエティはバラエティに過ぎない」と言っていた彼は、一言だけは「李在明大統領が真顔で聴くようにという思いでやりました」と付け加えた。舞台はバラエティであっても、狙いは政治であった。

「誤解しないようにしよう」というハッシュタグを何日にもわたって付けたことを見れば、バラエティ出演を巡って出てくるであろう言葉を彼も承知していたと思われる。院内発言台のない政治家にとって、土曜の夜の放送舞台は数少ないマイクであったのだろう。その頃、彼はKBSのインタビュー動画を投稿し、中央日報のYouTube番組に出演したと知らせ、4月5日には新村でSNLを撮影する日だというハッシュタグを残した。

組織のない政治家は、自らが放送局にならなければならなかった。

番組が放送された3月28日、彼のアカウントには一日に10件の文章が投稿された。そのうち6件に釜山亀浦市場の店の名前がハッシュタグとして付けられていた。パルパル水産、プンガクおかず、三代王豚足、ウェルビーイング刺身店、ミョルチおじさんコンお姉さん、コッキ商会。鮮魚とおかずと豚足と刺身が店名に入っている市場の路地の店々であった。「民心傾聴ロード」という言葉も一緒であった。

自分の顔がテレビバラエティに出ていた土曜日、彼の足は釜山亀浦市場の路地を歩いていたものと見られる。その日、釜山は50件を超える投稿の合間に6行のハッシュタグとしてかすめて過ぎ去っただけだった。なぜ釜山だったのかを説明する文章はなかった。

市場は釜山だけではなかった。4月1日にはソウル京東市場の商人たちに会ってきた親しい人々による投稿をシェアし、一行を添えた。「私たちは誠意を尽くします」。イベントが終わったからと去っていく政治ではなく、商人たちと関係を結び相生する政治を行いたいという決意が込められた文章であった。党を失った人間の文章に「私ども」という言葉は残されていた。翌日には一つの約束を掲げた。

「4月11日土曜日午後1時、花咲く春の日の週末に水原八達門でお会いしましょう」。旨洞市場や八達門市場をはじめ、市場5か所が集まっている水原八達門の前で市民と会うという予告であった。

政府に対する論評も止まらなかった。3月31日、李在明大統領が緊急財政命令に言及すると、彼は今が超法規的な「経済戒厳令」を発動する状況ではないと主張した。4月3日には一日に6件の文章が投稿された。「桜エンディング」という楽曲タイトル一行があり、夜には久しぶりだと告げてライブ配信を予告したが、その投稿のハッシュタグには4月の歌とSNLの感想と違法国政調査が一行に入り混じっていた。

同日、李在明大統領が釜山グローバルハブ都市特別法をストップさせたとし、「釜山の発展に使うお金がそれほど惜しいのですか」と問い詰める長い文章も投稿した。国民の力非常対策委員長と党代表として働いていた頃、必ず通過させなければならないと語ってきた法律であると彼は記した。花にまつわる歌一行と釜山のための抗議文が、同じ日の同じ画面に並んで流れた。

トゲのある言葉が民主党だけに向けられたわけでもなかった。4月5日には「『脱走兵』洪準杓、ついに『投降』しましたね」という一行だけの文章を投稿した。どのような出来事を指して言ったことか長く説明しない、短いからこそ余計に冷やかな揶揄であった。除名は2か月前の決定であったが、その除名を前後にした保守陣営の争いと空白は、この春にも現在形であった。

4月8日にも証人席の扉は開かなかった。彼の記述通りなら、民主党の議員たちは相変わらず呼べない理由を並べており、彼は相変わらず呼べと要求していた。彼の文章の一行はしばしば記事の見出しとなり、議員たちの返答は再び彼の投稿のネタとなった。言葉は遠くまで届いた。しかし証人採択も、国政調査の日程も、彼が決められるものは何一つなかった。党籍のない政治家の言葉は大きく響いたが、まだ何も決定できずにいた。

組織を失った人間には何が残るのだろうか。この春の彼に残されたものは、己の名と言葉、それを運ぶ一つのアカウント、「私ども」と呼べる数人、そしてどこへでも行ける両足であった。証人要求は相変わらず返答を得られず、水原八達門の約束はまだ日付が訪れていないままであった。4月9日、その足がどこに届いたかを示す動画が一つ投稿された。

前日、釜山万徳で白羊中学校の生徒たちと会って撮影した動画であった。街の名は万徳であった。ソウルの会議場の扉はなかなか開かなかったが、南の都市の学校前の路地は開いていた。彼の足取りが少しずつ南へと傾いていた。

第2章 万徳に家を構えました

2026年4月10日～4月19日

2026年4月13日、韓東勲のフェイスブックに短い投稿が寄せられました。「先日、釜山北区万徳に家を見つけました。」続く文章はわずか二つでした。「下校中の中学生たちと出会った、あの静かで暮らしやすい場所です。釜山市民のために生きていきます。」どのような家なのか、いつ引っ越すのかは書かれていませんでした。代わりに、一つの動画が添えられていました。

5日前の4月8日、万徳の路地で撮影された動画。学校を終えて帰宅途中だった白楊中学校の生徒たちと出くわした記録です。家の話は一行で終わり、残りは街と人々の話でした。

その日の動線は、後に彼が共有した『月刊中央』のインタビュー記事に残されています。4月13日午前、ソウル上岩洞でインタビューを終えた彼は、午後1時の列車で釜山に向かいました。記事は、このインタビューが釜山北区甲への出馬を決めた後の最初の公式日程であったと伝えています。

彼はこのインタビューで、保守がうんざりするような戒厳と弾劾の海を渡らなければならないとし、「弾劾の海を渡る船を私が操縦する」と、船長を必ずしも愛さなくてもよいのだと語りました。家を見つけたという投稿は、その列車に乗って下っていったまさにその日の投稿でした。

「万徳」という名前が彼のフェイスブックに初めて登場したのは、3日前の4月10日でした。釜山、万徳、名前、そして「名前も知らないで行かないわけがない」へと続くいくつかのハッシュタグがすべての投稿でした。どういう意味なのか、当時は理解しにくいものでした。彼がどこへ向かうのかを巡り、周囲の取り沙汰が多かった時期であったため、街の名前一つを謎のように掲げておいたものとみられます。

同じ日、彼は高校の友人である建築家が出演する家づくりの番組をよく見ていると語り、久々にその友人と通話した話を投稿し、翌日には京畿道水原の市場の路地を回りました。動線はまだ全国にまたがっていました。「万徳」という二文字だけが、フェイスブックの一角で答えを待っていました。

photo: その間に訃報がありました。4月11日、彼は前日に世を去った金鎮論説委員を追悼する長文を投稿しました。自分が順調なときには連絡がないのに、困難に直面したときにだけ電話して厳しい言葉をかけてくれた人、除名された後、寒い日の抗議集会の壇上に上がりながらも事前に連絡一つ寄こさなかった人であったと、彼は振り返りました。悲しく、呆然としていると記しました。党の外の春に彼の傍らを守っていた名前が一つ、そのように消えていきました。

万徳は釜山北区にある街です。この街が属する北区甲選挙区の国会議員であった共に民主党の田載秀議員が釜山広域市長選挙に出馬したことで、北区甲には国会議員の補欠選挙が発生しました。選挙日は6月3日でした。法務部長官と「国民の力」代表を務めた人物が、photo: その空席に向かって下りてくるというニュースは、それ自体がニュースとなりました。北区の住民にとって彼は、そ

れまでニュース画面の中の顔であって、路地で出くわす顔ではありませんでした。

視線が好意的なものばかりであるはずはありませんでした。韓東勲の投稿によると、田載秀候補はこの引越しを「空き巣狙い」と呼びました。主人が空けた家に書類から突きつけるという意味だったのでしょう。その頃、彼の投稿には「激戦地の中の激戦地」という言葉も取り沙汰されていました。保守候補にとって一筋縄ではいかない街という意味と、ゆかりもなく選挙のためだけに来たという疑念が、その言葉の中に重なっていました。

家の知らせを伝えた photo: まさにその日も、彼のアカウントは静かではありませんでした。photo: 彼は田載秀候補に対し、カルティエの時計を受け取ったのか明らかにせよと詰め寄り、「そんなノミの心臓で、どうして大釜山広域市長になろうというのですか」と記しました。田載秀候補が自分を指して尹錫悦大統領を裏切ったと発言したと伝えながら、それなら李在明大統領が戒厳を敷いた場合、photo: 止めないつもりなのかと問い返したりもしました。

田載秀候補が李在明大統領を裏切ったと言われるのを恐れて釜山特別法を阻んだという主張も付け加えました。すべて彼の主張です。photo: 彼の投稿に引用された番組での回答で、田載秀候補は捜査結果の発表を見ればよいと語っていました。時計を巡る攻防はその後も何日も続きます。同じ日付の画面には、時計と裏切りを問い詰める投稿と、家と中学生の話が並んで掲載されていました。

4月14日、photo: 彼は万徳2洞行政福祉センターで転入届を済ませ、住民登録上、釜山北区の住民となりました。保守再建の東南風を起こすという宣言と、「市民の家」という応酬がこの日の彼のフェイスブックを埋め尽くし、ソウルの捜査攻防に対しては「釜山からいつでも上京する」と答えました。転入届を終えたその日、photo: 彼の言葉の基準点は、すでに釜山へと移っていました。

書類上の手続きが終わった後の記録は、photo: もう少し静かです。塩パンを手渡してくれた近所の人があり、4月8日に路地で出くわした中学生たちとは再会して「また会いましたね」という短い投稿が残されました。市が立った後の時間の亀浦市場にも立ち寄り、苦労を重ねる市民たちにあいさつをしました。

翌日の4月15日水曜日の夜、彼は万徳2洞青年自主防犯隊の隊員たちと夜間巡回に乗り出しました。数十年の伝統を持つ集まりであると彼は紹介しました。隊員たちと万徳の隅々を歩きながらボイスフィッシング予防の案内チラシを配り、万徳は治安が全国のどこにも負けないほど良い街であり、その功績は数十年自主防犯活動を続けてきた住民たちにあると記しました。

安全で暮らしやすい釜山北区を全国に誇るという決意の末尾には、「誠心を尽くす」という言葉が添えられました。「誠心」という単語は、この頃から彼の投稿の最後にたびたび登場する口癖となります。その日のハッシュタグには戯言が一つ混ざっていました。この防犯隊における「青年」の資格は52歳までだが、自分は53歳の万徳住民だということです。1歳違いで青年になれなかった新住民の軽口でした。

ご近所のおじさんとして受け入れられたいという思いが滲み出ていたのでしょう。photo: 実際に翌日から、彼は自らを「万徳のおじさん」「北区のおじさん」とも呼びました。

巡回があった4月15日の投稿には、長官と党代表を務めた自分にとっても、自分の名前で一票を求めて選挙に臨むのは今回が初めてだという告白も掲載されていました。

4月16日には万徳レゴ村を歩き、徳川市場にも立ち寄りました。夜には自主防犯隊と万徳峠に登り、三日月フォトゾーンのあるその峠を「本当に美しい場所」と紹介しました。

立ち向かって戦う相手が誰になるのかは、まだ見えていませんでした。その数日の間、彼は民主党側の人物たちが北区甲への出馬の有無を大統領の指示や党の許可に委ねているとし、なぜ釜山市民にまず問わないのかと問い詰めました。曹国代表が釜山の代わりに平沢を選んだというニュースには、自分を避けて逃げたのだと記しました。photo: これもまた彼の主張です。

4月16日、徳川市場のある美容室で、彼は一つの長文を投稿しました。民主党の朴洙賢議員らが田載秀候補の辞任時期を遅らせ、北区甲の補欠選挙自体が開かれないようにすることもあり得ると発言したということです。彼はこれを「小細工」と呼び、次のように記しました。「私は来年も、2028年にも、その次のどのような選挙であっても、まさにここ釜山北区甲で出馬し続け、釜山北区甲の市民に対する義理を守り抜きます。」

今回の選挙がなくなったとしても立ち去りはしないという言葉です。選挙目当ての引越したという疑念に対し、彼は時間の長さで答える道を選んだように見えます。

4月17日早朝、市民に会いに出かける途中で金賢哲理事長の投稿を見たとし、彼は釜山が生んだ最後の保守大統領、金泳三元大統領の献身と勇気をここ釜山で引き継ぐと記しました。その日は雨が降っていました。雨の降る新万徳市場では商売が普段ほど振るわない日であるにもかかわらず、商人たちが温かく迎えてくれたと記しました。徳川地下街では、靴屋を営む兄弟福祉院の被害者と会い、厳しい事情に耳を傾けました。

公に知らせて助けを求めてほしいと頼まれたと明かし、弱者の保護は国家の任務であり最優先事項でなければならないと書きました。その日の夜には徳川駅へ向かい、地下鉄の終電が途切れる午前0時30分まで、帰宅する市民にあいさつをしました。疲れた帰り道に寄り添いたい気持ちであったという説明とともに、夜になると寒暖差が大きいので風邪を引かないようにという呼びかけを添えました。

4月18日土曜日の午前には徳川駅付近で市民と会い、ここで最後まで共に歩むと約束しました。自分は言葉を守ることを賭けて政治を行ってきたのであり、約束を破ればもはや政治を続けられない人間だと付け加えました。この日はマンションの敬老堂のお年寄りも訪ねました。photo: その投稿には「うちのマンションの敬老堂」という表現が登場します。転入届からわずか4日で、マンションの前に「うちの」がついたのです。インタビューが掲載された『月刊中央』が売り切れたと感謝の言葉もこの日に掲載されました。

4月19日に差し掛かる午前0時30分にも、彼は徳川駅にいました。商売を終えて帰宅途中だったある母親が、疲れているだろうに明るく迎えてくれたとし、一生その表情を忘れないと記しました。photo: その投稿の結びの言葉は「韓東勲 敬具」でした。photo: その日曜日の投稿には、立ち去らずに最後まで釜山を発展させてみせるという決意が再び示されています。

この10日間を見る眼差しには二つのものがありました。一方はカレンダーを見ます。議席が空くと家が現れ、転入届の翌日の夜から巡回が始まった順番を見ます。photo: すべての動きが6月3日に合わせられているという見方です。「万徳」という名前が初めて登場した日から家の公開、転入届、最初の巡回までにかかった時間はわずか5日でした。もう一方は足取りを見ます。

彼は実際に住所を移し、夜の路地を歩き、雨の市場や終電の時間の駅前に立っていました。心の中は覗き込めなくても、足取りは数えることができるという見方です。二つの視線は同じ10日間を見つめながら、互いに異なるものを数えていました。

見知らぬ政治家は何によって「隣人」となるのか。photo: 書類は一日で済みます。宣言は一行で済みます。隣人になるということは、それよりも長くかかることです。この10日間の間に彼が出した答えは「時間」でした。何時にどの路地に立っていたかで自身を証明しようとしたように見えます。塩パン一つ、巡回一回り、終電の時間のあいさつが、その証明の単位でした。

「名前も知らないで行かないわけがない」と言っていた謎めいた最初のハッシュタグから10日、photo: 彼は「万徳のおじさん」という呼び名一つを得ていく最中でした。photo: それで十分なのかは誰にも分かりませんでした。万徳の夜を歩き尽くした人に、今度は亀浦の朝が待っていました。

第3章 亀浦市場の朝

2026年4月20日～5月8日

朝の亀浦市場の路地を、ひとりの男が歩いています。露店の前で腰をかがめて挨拶し、お年寄りの手を握り、ある日はたい焼きを1個分け合って食べます。サインをしてほしいと近づいてくる住民もいます。2026年4月下旬から5月初めまで、釜山北区でほぼ毎日のように繰り返された朝の光景です。亀浦市場と徳川市場、万徳のアパート散歩道や地域の敬老堂の間を、彼はこまめに回っていました。

万徳ラッキーアパートの散歩道で万徳3洞の住民たちに会った日には「私たちの街をもっと暮らしやすい場所にしたい」と書き、夜にも「北区のために全力を尽くす」という文章が徳川から投稿されました。ソウルで国全体を相手にしていた政治家の一日市場の通路の幅に合わせて小さくなっており、彼の投稿には「私たちの街」という言葉があちこちに添えられていました。

4月26日、彼は見覚えのある学生と再会しました。少し前の朝、自分と話をしていたせいで試験に遅れたというあの学生です。本当に試験に遅れたのかと尋ねたところ、最後まで答えずに立ち去ってしまったと彼は記しました。添えられた動画には「韓東勲を見るのに夢中で試験にも遅刻」というタイトルと「シャトル陳情第1号」という表示が付けられていました。微笑を誘う文章でしたが、結びは真剣でした。「釜山北区の通学シャトルは絶対に必要です。」

路上で寄せられたひとつの訴えが、こうして最初の陳情となりました。答えはまだ出ていないものの、問題にはすでに番号が振られていたのです。

この頃、彼のFacebookは足跡の帳簿のように積み重なっていきました。1日に20件を超える日も珍しくなく、4月22日だけでも29件が投稿され、30件を超えた日もありました。徳川市場の中の美容室で住民と会い、具南駅の前でパンで最初の食事を済ませ、亀浦市場の中では本物の「亀浦クロス（麺）」について語りました。ソウルを往復する道中、聞慶サービスエリアでトックラーメンを食べたことまで投稿のネタになりました。

同じ人に1日3回会った日には「偶然ではなく運命だ」と記しました。ショート動画を見たというお年寄りが、街中で先に彼に気づくこともありました。4月29日の投稿はわずか2件でした。そのうちの1つは次のようなものです。「今日も亀浦市場で市民の皆様にお会いしました。誠心誠意尽くします。」4月の終わりに彼がシェアした記事のタイトルには、「亀浦市場で近所のヒョンニム（兄貴分）になった」という表現が含まれていました。

子どもたちが先に彼に気づきました。4月24日、彼は「うちの街の小学生市民が撮ってくれた証明写真」と称して動画を投稿しました。動画の中の子どもは矢継ぎ早に質問します。「おじさん誰？どこから来たの？ここに住んでるの？本当？本当？」麻辣湯を食べに行こうとしていた学生たちは、このおじさんについて歩くうちに足が遅くなり、彼の投稿で「麻辣湯ボーイズ」という名前を

授かりました。数日後には、その子どもたちとの別れを惜しむハッシュタグが添えられました。

亀浦初等学校の生徒を「後輩殿」と呼び、自身を「第68期生級の卒業生」と書く冗談もありました。4月27日には「おじさんは韓東勲おじさんだよ」という子どもの口調の掛け声が投稿に添えられ、パパやママに向かって「韓東勲おじさんだ!」と叫ぶ子どもの動画も投稿されました。5月5日の「子どもの日」、彼はこう記しました。「子どもは大人より一時代新しい存在です。」

北区の子どもたちを守る頼もしいおじさんになる、という約束がそれに続きました。

同じ4月26日、彼は釜山北区甲内にあるソロモンローパークで市民たちに会いました。法務部所属の施設です。彼はこう記しました。「そういえば法務部長官を辞めてから、法務部所属の機関を訪れたのは初めてな気がします。」市民がこの公園を愛してくれていることが前長官としてありがたかった、という言葉が続きました。かつてその省庁全体を指揮していた人物が、今や客としてその庭を歩いていました。文章には恨み言も長い回顧もありませんでした。

過去の肩書と現在の境遇との距離を、これほど淡々と測った文章も珍しいでしょう。4日後、彼は「わたあめ」という言葉とともに、再びこの公園を訪れた証を残しました。

その2日後には亀浦畜産物卸売市場の商人たちを訪ねました。歓迎に深く感謝すること、北区の名物になるほど魅力的な場所であること、自分が発展させてみせることを彼は記しました。感嘆符が添えられた決意でした。商業地帯の話は卸売市場にとどまりませんでした。亀浦と徳川の市場の路地、美容室や薬局といった店舗が毎日のように彼の動線上にありました。

4月22日の夜には洛東江の開発をテーマに住民たちと懇談会を開き、4月20日には釜山北区甲の保護者たちとの懇談会を終えたことを知らせました。交通、商業、子育て支援。路地で受け取る質問は日々積み重なっていきましたが、彼が出す答えはまだ短い一行にすぎませんでした。約束が文書に結実するのは、これから訪れる時間の中でのことです。

書類の上でも、彼は少しずつ北区の人間になっていきました。4月24日、北釜山セマウル金庫の本店で出資金を払い、組合員となりました。「一日一日、より本当の北区民になっていきます」とその日記しました。4月25日には万徳2洞青年会の「第104回お年寄りをもてなす日」イベントで配膳を担当しました。119年の歴史を誇る亀浦初等学校を訪れ、視覚障害者とボランティアが肩を並べて歩くカルメッキルのイベントにも一緒に参加しました。

北区の長老たちの前で、彼は学ぶ姿勢を前面に出しました。4月20日、敬老堂では「北区のお母様方の息子のように政治を行います」と記し、4月30日には敬老パーティーや海兵戦友会北区支部を訪れ、「応援に責任感を感じる」と残しました。行楽に出かける長船総合社会福祉館のお年寄りに挨拶した日もありました。

5月2日には万徳と徳川の敬老堂でご挨拶して学んだという投稿を、亀浦の錦水寺と弥勒寺で有難いお話を伺ったという投稿を上げました。「学んだ」という言葉と「受け取るばかりだ」という言葉が、この頃の投稿ごとに繰り返されます。組織も党籍もなく路地を巡る人物が選べる言葉は、そ

れほど多くはなかったはずです。

彼の投稿の末尾には、長らく「北区北区韓東勲」というスローガンが捺印のように記されていました。4月27日からは新しいスローガンが現れます。「北区の未来、最後まで韓東勲」。古いスローガンがすぐに消えたわけではありません。2つのスローガンはしばらく並行して使われ、日が経つにつれて新しいスローガンが前面に出るようになりました。市場では「北区を裏切って去ってはいけない」という念押しも受けました。

「この人物は結局去ってしまうのではないか」という疑問は影のように付きまとい、新しいスローガンの「最後まで」という言葉は、その問いに対する答えだったのでしょうか。4月21日の投稿は「北区が私の政治の始まりであり故郷です」という文章で始まり、次のように続けました。「北区を離れません。約束を守る韓東勲の政治、それによって証明してみせます。」

5月の連休が始まりました。初日の午前中も、彼は亀浦市場にいました。市場が広いと、人通りが少ない場所を選んで挨拶に回ったと記しています。同日、空に向かって拳を突き出すシャドーボクシングの動画が投稿され、メイキング動画がそれに続きました。シャドーボクシングは相手なしに一人で行う練習です。自身を釜山方言で「オシップセイ（お越してください）」と書いていた人物が、画面の中で一人拳を突き出していました。

その日の夜には徳川若者の街で市民たちと会い、閉店間際の店の前での退勤の挨拶も動画として残りました。5月3日は雨の降りしきる日曜日でした。彼はその日も亀浦市場で市民に会い、亀浦3洞のバス終点にある紅参堂薬局の周辺まで足を伸ばしました。

翌日には北区パークゴルフ協会会長杯大会で市民たちと会い、ソウルから釜山まで自転車で駆けつけた先輩政治家の金榮宇を華明生態公園で迎え、一緒に生配信を行いました。「おじさん、私たち社稷高校に通ってるんです」と声をかけてくる学生たちの動画も、この頃に投稿されました。

同じ時期、彼のアカウントには毛色の異なる投稿も上がっていました。4月20日、彼は金慶洙・民主党慶南知事候補について「選挙で世論操作を行って収監された人物が再び選挙に出ることは、国民に対する礼儀ではない」と記しました。5月3日には「大統領が自身の事件の公訴を取り下げさせれば明らかな弾劾事由だ」「国民とともに阻止する」と記しました。市場で手を握り合っていた人物と、弾劾を口にする人物が、ひとつのアカウントの中に共存していました。

路地での挨拶とソウルを狙い定めた主張は、この期間を通じて同じ画面上で交互に繰り返されました。

5月5日の投稿では、店の名前がそのままタイトルになりました。「オバロック」「モナミ」「忠清商会」。看板に書かれた名前を一軒一軒呼び上げていくスタイルでした。同日、新万徳交差点では車に向かって頭を下げ、ボウリング場の前で試験を終えた学生たちと会った形跡もあります。亀浦3洞では、一匹の猫が投稿の主人公になりました。

5月6日の早朝には地下鉄万徳駅で通勤・通学する市民を迎え、徳川総合社会福祉館ではお年寄りの食事を補助し、夜にはグリーンコア交差点で夜間の挨拶を行いました。5月7日の朝は徳川ロータリーで通勤車への挨拶を、夕方には亀浦大橋交差点で退勤路の挨拶を行いました。同日、中里敬老堂では101歳のお年寄りに会いました。18歳で万徳に嫁ぎ、83年もの歳月を万徳で生きてきた方でした。

深い感動を覚えたと彼は記しました。5月8日にはロイター通信とのインタビューが報道されたという投稿と、万徳総合社会福祉館でお年寄りに「いつもいただくばかりです」と感謝を伝える投稿が並んで掲載されました。国際通信社の質問と福祉館のお年寄りたちの歓待が、ひとりの人物の同じ一日の中にありました。

路地で交わされた生の声も投稿に残されました。「一度も投票したことがないけれど、今回は必ずあなたに入れます」という言葉を彼はそのまま書き写し、「それなら100票は自分が引き受ける」という方言での意気込みもハッシュタグに残しました。肩を叩いて去っていったお年寄りには、「本当にしっかりやります」という返答が返されました。親しみのある光景の反復がそのまま票に結びつくのかどうか、そのときは誰も確信を持って言えませんでした。

この時期の彼は、答えを文書にまとめる代わりに、身体的な行動の反復をまず選んだように見えます。顔を覚えることが先であり、約束を束ねるのはその次だという順序だったのでしょうか。だからこそ通学シャトルはまだ陳情番号にすぎず、卸売市場の未来はまだ一本の感嘆符として立っていました。洛東江懇談会での話、保護者たちの不安、毎朝積み重なる願いごと。どれひとつとして、まだ公約集の文章にはなっていませんでした。

毎日顔を売ることと、まだ紙に刷られていない約束。その2つの間の距離は、歩みによって測れるものではありませんでした。

「父母の日」が過ぎ、カレンダーは5月中旬へと向かっていました。亀浦市場の朝の挨拶は、翌日もその翌日も続くはずでした。ただ、相手のいない一人きりで拳を突き出す練習の時間は、終わりを迎えようとしていました。同じ路地で同じ票を求める他の名々が、間もなく到着する番でした。

第4章 三人の候補、一つの選挙区

2026年5月9日～5月20日

2026年5月15日、釜山北区甲の国会議員補欠選挙の候補登録窓口に韓東勲の書類が受理されました。どの党の名も掲げられていない無所属候補としての登録でした。1月29日に国民の力から除名された人物が、3か月半ぶりに党の外から選挙に打って出たのです。同じ選挙区には共に民主党のハ・ジョンウ候補と国民の力の朴民植候補が登録し、三人による対決という報道がその日に出了た。

彼を除名した党が独自の候補を立てたため、一つの選挙区内に保守候補が二人存在することになりました。「ハ・ジョンウ、朴民植、韓東勲が引っ越してきた街」というタイトルを掲げ、万徳洞の民心を聞き取る記事が出たほど、三人は同じ街の新しい住民でもありました。住所は重なり、獲得を目指す議席は一つでした。投票日である6月3日は19日後に迫っていました。

登録を終えた日、彼は覚悟を綴りました。自分が「民主党政権の公訴取消の暴走を粉碎する人物」であること、そして北区の失われた20年を取り戻させる人物であるということです。「いつも後回し、いつも乙であった私たちの北区、亀浦、徳川、万徳を、大韓民国の第1位であり真の甲にしてみせます。」

釜山北甲で韓東勲が当选すれば民主党は本当に厳しい立場になるという民主党の朴智元議員の言葉を引いて、「その通りだ」と切り返すこともありました。歴史的な選挙になるだろう、大韓民国の均衡の重りを合わせるのだという言葉は、その日の記事のタイトルに躍りました。ソウルの政権と戦うという言葉と、北区の優先順位を引き上げると言葉が、一つの文章の中に並んでいました。登録の日も街頭での挨拶が止まることはありませんでした。

その日の短い投稿には、「レインコートの双子」というタイトルや四つ葉のクローバー、登校途中に横断歩道を渡ってきた徳川中学校の生徒の話、アイスクャンディーという言葉が小学生と並んで記された投稿が、痕跡のように残りました。

登録に至る6日間も過密を極めていました。5月9日、彼は妻とともにこどもの日のイベントで市民に会ったと書き、同日に出陣記者会見を開きました。記者会見を伝えた記事のタイトルには、自身の勝利が政権牽制と保守再建の出発点であるという言葉が載せられました。翌日には選挙事務所の開所式が開かれ、その様子は動画で生中継されました。「開所式会場の前です。

必ず勝利します。」という短い言葉とともに、彼はこう綴りました。「昨日の出陣記者会見では、私が北区の住民の皆様にお話しいたしました。今日の開所式では、北区住民の皆様のお話をお聞きます。」同じ日、梁山で開かれた万徳歓喜教会のピクニックにまで足を運び、牧師や市民たちに挨拶しました。

投稿は相変わらず溢れ出しました。30件を超えた日が相次ぎ、5月19日の1日だけで40件がアップされました。その40件の一日には、敬老堂やビリヤード場、食堂までが投稿に登場しました。パークゴルフ場で市民に出会い、福祉館のジャージャー麺ボランティアに参加し、人通りの少ない亀明駅まで足を運んで「すべての北区へ訪ねていきます」と記しました。

亀浦3洞のバス終点ではあらゆる場所に行くという決意を残し、浦川交差点や高麗堂三差路といった要所での朝夕の挨拶が続きました。午前5時50分にベトナム戦争参戦者会北区支部の忠魂塔参拝を見送った日もあり、早朝の生活体育館で行われていた気体操の集まりに立ち寄り、夜には亀浦大橋から亀南駅まで亀浦2洞の一帯を巡りました。

万徳駅での朝の通勤の挨拶と亀浦大橋交差点での退勤の挨拶が一日の両端にあり、土曜日の深夜には徳川フォレナや淑澄駅周辺で市民に出会いました。北部美容協会総会や北区サッカー協会長旗サッカー大会で挨拶し、徳川聖堂で「聖母の夜」のミサに与ったと書き留めました。土曜日の早朝には求礼へ旅行に出かける市民たちに挨拶しました。手書きの手紙で住民と挨拶を交わしているという記事も出ました。

お金と人が集まるようにするという言葉が、その記事のタイトルに添えられていました。

人々との場面も積み重なっていきました。南山丁駅の前では、遠くから見て駆け寄ってきた市民に出会い「桃園の誓い」というタイトルを付けました。バス運転手の応援を受けた痕跡もあり、お元気でいらっしゃるかと訪ねて行ったところ、お休みになられていたため待ってからお会いしたという投稿もありました。徳川のカフェに立ち寄っては「温かい心とおいしいパンがある」と述べ、良い政治を必ず行くと書き、「北区の市民の方々の姿が見えれば、私は駆けつけます」という文章も残しました。

5月14日、亀南敬老堂をあとにした道中について、彼はこう記しました。「亀南小学校の子どもたちが『韓東勲だ』と言って群がってきました。リールズやショート動画に自分たちを載せてほしいとも言われました。」体験学習に行ってきたのだとわざわざ彼に知らせる子どもたちの動画も投稿されました。子どもたちは党を知りません。分かったのは顔と名前です。党名なしで戦う選挙において、彼が頼れるものも結局はその二つだったはずです。

ソウルに向けられた投稿も acquisition そのままでした。5月12日、彼は「恥を知らない者たちが監察委員の腕章をはめ、権力者の雇い暴力団員の役割を果たしています」と記し、特別検察官が自身の出国禁止の延長を要請したという記事を引用して、露骨な選挙介入だと主張しました。そこに同じ選挙区の二つの名へ向けられた投稿が加わりました。

5月11日、彼は釜山KBSが提案したTV生放送討論について、提案を受けた直後に応じると回答したことを明かし、次のように要請しました。「ハ・ジョンウ候補、朴民植候補に対し、釜山KBSが提案したTV放送討論に正々堂々と応じることを要請します。」「討論で勝負しよう」というタイトルの現場動画も共有しました。地域放送の対談番組に出演し、釜山日報とともに徳川若者の街を歩く同行インタビューにも応じました。

討論の要請はその後も多くの投稿で繰り返されましたが、彼が引用しておいた地域放送の報道は、候補者討論会が5月28日に一回だけ開催される予定であると伝えました。

投票用紙の番号（記号）も決まりました。番号は国会に議席が多い政党の候補から若い番号を受け取り、無所属候補は政党候補たちの後ろの順番に回されます。韓東勲の番号は6番でした。5月16日、彼は数字の6をワッペンで縫い付けたという短い文章を投稿しました。翌日の日曜日朝には「北区の6箇所でのお出かけ途中の市民の方々にお会いした」とし、投稿の最後に6を強調して記しました。「順位」という言葉自体は、登録前から存在していました。

失われた20年を語った放送対談のタイトルに、「大韓民国第1位へ」という言葉が添えられました。登録の前後から、その言葉は投稿のたびに添えられるスローガンとなりました。それまで使っていた「北区の未来」「最後まで韓東勲の傍に」の横に、新しいスローガンが増えていきました。「韓東勲が北区を第1位に」。今や北区が甲になるという言葉も一緒に掲げられました。6番目の番号を受け取った無所属候補が、「順位」という言葉をむしろ前面に押し立てたのです。

いつも後回しにされていた北区と、後ろの番号になった自分を重ね合わせ、一緒に一番前へ行こうという意味だったのでしょう。徳川若者の街に立ち、人通りの多さで釜山で有名だったこの街が今はそうではないとし、北区の失われた20年を「北区再建」で克服すると記しました。

二つの党の候補には全国規模の政党組織がありました。無所属候補にはありませんでした。政党の候補が党の名と組織、馴染みのある番号とともにスタートを切るなら、無所属候補はその余白を市民の手で埋めなければなりません。なるべく一人で動いてこそより多くの人に会えるという短い投稿の痕跡も、この時期に残されました。5月17日、徳川ロータリーの選挙事務所で、北区の市民によって結成された選挙対策委員会が発足しました。

彼はこの選挙運動を「私たち北区の人々が先頭に立ち、主人公となる選挙運動」と呼びました。熱く応援してくれた心を忘れず、北区再建と保守再建で恩返しするという投稿もアップされました。「行動する多数の逆転勝利。ともに行動してください!」という訴えもありました。後日の記事は、支持者とボランティアが無所属候補の組織の劣勢を補ったと評価しました。

保守候補が二人いれば、保守票は割れる可能性があります。割れた票の利益は残る一人に転がり込むという計算は誰にでもできました。傾向の近い候補が一人のために力を合わせる「一本化」という言葉が、この選挙で終始つきまとった理由です。しかし、保守候補の一本化は結局無に帰しました。韓東勲と朴民植はことあるごとに衝突したと記事は伝えました。韓東勲の訴えは、相手候補ではなく市民に向けられていました。

「勝てる保守候補は韓東勲だけだからこそ、市民の皆様の手で釜山北甲の保守陣営候補を私、韓東勲に一本化していただきたい。」候補同士で票をまとめる代わりに、市民が票によって一本化を作り出してほしいという要請でした。5月18日のラジオインタビューでは、一本化を「従属変数」と呼びました。勝てる候補が誰であるかが明らかになれば、一本化は自ずとついてくるという考えだったのでしょ

同じ日、彼は保守再建とは保守が再び語る資格を回復する過程であると主張しました。違法な戒厳令を最後まで擁護した人々が公訴取消の問題を語って国民が納得するのかと問いかけ、誰よりも早く戒厳令に反対した自分にこそその資格があるのだと語りました。党と党の対決であれば公認の段階で終わっていたはずの整理が、この選挙区では投票箱の前に立つ有権者に委ねられていたのです。

その対立の中でも、かつての党の側の名前が彼の投稿にかすめました。候補登録の日の短い投稿一つには、「裴賢鎮」という名三文字だけが残されました。裴賢鎮議員が訪ねてきた形跡と見られます。5月19日には、裴賢鎮、高東真、朴貞勲という名が徳川若者の街と並んで記されました。党の公認は朴民植候補に渡りましたが、保守政治家すべての足取りが公認状に従ったわけではなかったようです。票よりも先に、足取りが分かれています。

5月20日は雨が降りました。彼は雨の水曜日の徳川ロータリーと徳川地下街を巡り、洛東江で漁をする亀浦漁村会の市民たちが新しい北区を切望していたという投稿を残しました。亀浦市場の裏路地で89年物のミシンを回すおばあさんに出会った話も書き留めました。夜にはこのような投稿をアップしました。「たった今、雨の降る遅い夕方に南山丁交差点で市民の皆様にご挨拶いたしました。北区に誠心誠意を尽くします。」

民心の前で謙虚に誠意を尽くすという決意も、その日一緒に投稿されました。前日である5月19日には陣営事務所で最初の公約を直接説明するという予告があり、この日は「ニュー北区プラン」という名が掲げられました。路地の要望が文書になる番でした。3日前の投稿では、21日夕方に亀浦市場サムジ公園で記号6番の出陣式を開き、白い波で公園を埋め尽くすと予告していました。

午前0時を過ぎれば、13日間の公式選挙運動が始まります。投票用紙には今や三つの名が載ります。二つの名の横には党の名があり、一つの名の横には無所属の三文字があります。北区の有権者は党を選ぶのか、人を選ぶのか。その答えを聞きに行く13日間の路地が、午前0時の向こうで待っていました。

第5章 路地の13日間

2026年5月21日～6月1日

徳川（トクチョン）駅に終電が入ってきました。一日を使い果たした人々が駅を出てきました。2026年5月21日、公式選挙運動が始まった日、韓東勲はそこにいました。終電で帰宅する疲労の滲む市民たちと会いながら選挙運動を始めた、彼はFacebookに書き込みました。北区の市民の皆様へ誠心を尽くすという言葉がその後に添えられました。同じ日に投稿された文章には、決意が一行で込められていました。「公式運動初日から誠心を尽くします。」

投票日である6月3日の前日まで、公式選挙運動に許された時間は13日間でした。

初日の昼には出陣式が開かれました。彼はこの日、自らが歩んできた時間を4つの文章に凝縮した投稿を上げました。「1ウォンも受け取らずに生きてきました。強者に強く、弱者に優しく生きてきました。嘘をつかずに生きてきました。約束を守りながら生きてきました。」そして、北区市民との約束を守る機会をぜひ与えてほしいと訴えました。党の名を背負わずに立つ候補が差し出せるものは、結局のところ歩んできた経歴と今後の約束だけだったはずです。

翌日には遊説車が路地を回りました。遊説車を見て駆け寄ってきた小学生がいたと、彼は5月22日の短い文章に残しました。数日後には、遠くから写真を撮ってもよいか許可を求めてきたという小学生ふたりの話も投稿されました。子どもたちには投票権がありません。それでも路地で候補者にいち早く気づいて駆け寄ってくるのは、決まって子どもたちでした。5日後、彼は「私は子どもたちにとって、話しやすい親しみやすい人でいたい」と書き記しました。

5月22日の夜、アカウントに残された文章は短いものでした。「明日はもっと頑張ります！」

無所属候補の13日間は、政党候補の13日間とは異なる姿をしていました。党の組織がある候補ならば、この期間を党の名前と党の人々で満たします。韓東勲にはそのどちらもありませんでした。聯合ニュースは後日、彼が支持者やボランティアたちの支援によって組織の劣勢を補ったと報じました。彼のアカウントにも初日から「本当に懸命に活動してくださるボランティアの方と挨拶を交わしました」という投稿が残っています。組織の外から差し伸べられる手もありました。

初日の出陣式では、保守と中道の市民団体をまとめる汎市民社会団体連合（汎社連）が支持を宣言しました。彼は、汎社連の理事長が元々は自分を嫌い、自分の核心的な考えに同意しない人物であるにもかかわらず、この路地まで足を運んでくれたと紹介しました。5月23日には金泳三元大統領の息子である金賢哲・金泳三大統領記念財団理事長が陣営事務所で支持を宣言し、彼は釜山北区でYS精神を継承すると応えました。

党が担うべき仕事を人々が分担し、残りは候補者自身の体が埋めなければならなかったはずです。

その熱気は、一日の投稿数にも現れていました。少ない日で24件、多い日には78件もの投稿が彼のアカウントに上がりました。5月25日（5月25日）が75件、二日後の5月27日が78件でピークに達しました。遊説の予告、路地で撮影した写真、今通過した街やマンションの名前。文章は候補者の足取りをほぼリアルタイムで追いかけていました。当初、投稿ごとに添えられていたスローガンは「北区の未来、最後まで韓東勲」でした。

5月26日からは「北区のあらゆる場所に韓東勲」と「路地裏まで韓東勲」が加わりました。スローガン通り、彼は徳川駅、南山丁駅、亀南駅の周辺で挨拶し、5月24日の釈迦誕生日には雲水寺と三光寺で市民の声に耳を傾けました。投稿の冒頭には「たった今」「現在」「1時間前」といった言葉が頻繁に付きました。たった今ラッキー3次マンション前、現在亀浦1洞鎮守の森付近、2時間前万徳2洞行政福祉センター前。

彼は「駆けつけてくださればすぐに降りていきます」と書き、窓やベランダ、屋上から手を振る住民たちに「窓からのご挨拶、really（本当に）ありがとうございます」「ベランダからの応援、ありがとうございます」と応えました。万徳グリーンコアマンションの前では、あまりに多くの住民が降りてきて驚いたという投稿を上げ、走る車の中からサインを求めてきた市民のエピソードも残しました。5月27日からは「雨が降ろうと雪が降ろうと最後まで北区と共に」というスローガンも文章に添えられ始めました。

遊説の道具も、組織の代わりに身体と画面でした。午後5時、徳川若者の街のダイソー前での遊説を予告し、自身のYouTubeチャンネルで生中継すると知らせ、Instagramの相互フォローを求める動画を投稿し、夜には街宣車からの挨拶に回りました。徳川駅と亀浦大橋では夕方の挨拶が続き、予告なく街頭に繰り出して市民と会った日もありました。決められた動線は党の日程表ではなく、候補者の二本の足が作り出しました。

75件が投稿された5月25日の一日だけでも、動線は北区を一周しました。市民たちが気づいて近づいてくると、遊説車から降りたと彼は書きました。徳川ロータリーで降りて市民と会い、亀南駅付近を回り、亀南市場の大星マンション付近やラッキーマンション、ザ・イースト東門商店街の前を通り、万徳2洞の最も高い場所にあるハンシンマンションの近くまで登って行きました。午後5時には亀浦高麗堂交差点での集中遊説が予定されていました。

妻が敬老堂でお年寄りにお会いしたという投稿もこの日に上がりました。そしてこの日、万徳3洞の店舗兼住宅の密集地域で火災が発生しました。彼は消火活動の妨げにならないよう、鎮火した後に現場に向かったと記しました。人命被害がなくて本当に良かったという言葉、大変驚かれたであろう近隣住民を気遣う言葉、遅い時間まで尽力した消防士たちへの感謝が続けられました。票を訴えて歩いていた路地と、火事の起きた路地は、同じ路地でした。

握手とスローガンだけの13日間ではありませんでした。彼は選挙期間中、北区の公約を3つの方向にまとめて発表しました。人とお金が集まる都市。洛東江にK-複合アリーナを建設し、洛東江一帯を文化と商圈とレジャーが調和するゴールデンベルトとして整え、亀浦駅と洛東江生態公園を結ぶ生態スカイロードを整備し、金光夕焼け橋の通路を亀浦市場まで接続するという約束でした。日

常が幸せな名品都市。

白楊山を貫通して亀浦と草邑を結ぶ亀浦トンネル、亀浦大橋のリバーシブルレーン制と補助橋梁、亀浦駅のKTX増便、京釜線鉄道の地下化が盛り込まれました。温かく、より心強い都市。子どもから青年、障害者家族、お年寄りまで、生涯周期に寄り添う福祉でした。人とお金が集まってこそ景気が活気を取り戻し、商圈が復活し、雇用が増えると彼は記しました。

路地の外からの報せに、歌を止めた日もありました。5月26日、ソウルの西小門高架車道の撤去工事中に崩落事故が発生し、人命被害が出ました。彼は犠牲となられた方々の冥福を祈り、ご遺族を慰める投稿を上げ、負傷者の快復と消防当局の安全を祈願しました。彼の遊説現場で選挙ソングの音量が消されたという報道が続きました。

78件が投稿された5月27日、彼のアカウントに転載されたインタビューには次のような問答がありました。「私には負ける自由はなく、勝たなければならない責任だけがあると思っています。」翌日には一行の文章が投稿されました。「遅い夕食をとって、再び市民の皆様にお会いしに行きます。」昼の遊説と夜の路地の間に、夕食がようやく挟み込まれました。無所属候補の一日は、人々が夕食の膳を下げる時間にもう一度始まりました。負ける自由はないと考える人には、休む自由もなかったはずです。

5月29日、期日前投票が始まりました。彼は万徳2洞行政福祉センターに設けられた期日前投票所で一票を投じました。1か月半前に転入届を出した、まさにその建物でした。公約が路地の顔と出会った日でもありました。この日、彼は亀浦3洞が島のように孤立しているとし、亀浦と草邑を結ぶトンネルによって劇的に変えると書き記しました。

1か月前、そのトンネルを必ず作ってほしいと頼んできたお母さんに期日前投票の日に再会したところ、公約にしてくれたことを感謝されたため、むしろ自分の方こそ感謝していると述べました。この日も彼は北区の隅々を回りながら挨拶したと記し、その間に「月が見えますね」という短い文章が挟まれていました。路地を歩きながら見上げた空だったのでしょうか。同じ日の夜11時10分に投稿された文章は、「北区の失われた20年」という言葉で始まっていました。

都市ガスが引き込まれていないいくつかの地域の住民が、全載秀、朴民植議員にいくら訴えても解決しなかったと言っていたとし、自分が当選して責任を持って対処すると書き記しました。二人を向けた批判は彼の主張です。都市ガスの話は彼が路地で耳にした住民たちの悲痛な訴えであり、「失われた20年」は彼が遊説期間中ずっと繰り返し口にした言葉でした。

攻防もありました。選挙期間中、彼に向けて偽装転入の疑惑を提起する主張がなされ、彼は「低劣なネガティブキャンペーン」と反論しました。疑惑は疑惑として、反論は反論として記事の見出しになりました。主張と主張が対立する間も、路地での挨拶が止まることはありませんでした。

5月30日、徳川若者の街で遊説した後、彼はこう書き記しました。「風で世界を変えることはできません。投票によってのみ変えることができます。」この日の遊説で彼は、自分に反対する政治家とは戦っても、自分に反対する市民とは戦わないのが鉄則だと語りました。自分を強く批判して

いたある市民がこの日、「それでもお前は本当に頑張っているな、お前に投票するよ」と言ってくれたという話も遊説で伝えました。

選挙が終われば再び傷を縫合しなければならないとし、自分が縫合するとも述べました。同日、亀南駅前の商店街では、中学生たちが自分が来たと聞いて外で待っていたとし、不思議だと感じた様子を見せました。「お母さんに、会ったら写真撮ってきてって言われました」と話した小学6年生の生徒のエピソードもこの日に残されました。子ども言葉の背景には、夕食の食卓でこの選挙について語り合う家庭があったはずです。投票用紙において、彼の名前は6番目、一番下の欄にありました。

記号6番。彼は自分の欄の位置から知らせなければならない候補者でした。

5月の最終日にも、彼は亀浦市場にいました。この日アカウントに投稿された文章は24件で、路地を回った11日間のうち顕著に少ない数字でした。叫んでいたアカウントが少しずつ言葉を控え始めました。「風では世界を変えられません。投票によってのみ世界を変えることができます。」前日の遊説での言葉が、この日再び投稿されました。

そしてカレンダーが6月へとめくられました。終電での挨拶で開かれた路地の時間が、終わりに向かって進んでいました。遊説車を見て駆け寄ってきた子ども、窓やベランダから伸ばされた手、火事のあった路地の夜、夜11時に投稿された都市ガスの話とその時間を通り過ぎていきました。この路地の票は何によって動くのか。遊説車の声か、3つの方向性の公約か、路地で握り合った手か、夕食の食卓での会話か。答えをあらかじめ知る人は誰もいませんでした。

答えは2日後の夜、開票所の灯りの下で明らかになるはずでした。

第6章 明け方の1,392票

2026年6月2日～6月4日

「国を変えられるよう、投票してください。」2026年6月3日、投票日の韓東勲のフェイスブックに投稿された一行である。遊説車と拡声器の時間は前夜で終わり、候補に残されたのはお願いだけであった。彼はこの日一日で42件の投稿を上げた。そのほとんどが数行の訴えであった。「今すぐ必ず投票してください。風だけでは変えられません。投票で変えられます。」

「投票してください」という7文字にハッシュタグだけを添えた投稿もあった。同じお願いが朝にも昼にも少しずつ形を変えて繰り返された。口調は淡々としていたが、回数は淡々としていなかった。その回数が候補の心境を物語っていたのだろう。

朝7時29分の投稿は前夜の様子を伝えていた。「昨晚の最終遊説です。最後まで亀浦、徳川、万徳に誠意を尽くします。必ず投票してください。風だけでは変えられず、ただ投票によってのみ変えられます。」50枚を超える写真と一緒に投稿された。ボランティアに向けた投稿もあった。「最終日の夜12時まで人影が途絶えゆく街頭で120度のお辞儀を続けられたボランティアの皆様に感謝申し上げます。」

6月2日、選挙運動が認められた最後の夜のことである。行き交う人がほとんどいない街頭で行うお辞儀は、票になるかどうかかわからないお辞儀である。そのお辞儀を午前0時まで続けた人々がおり、党の組織なしに立った候補にとって、こうした人々が組織に代わる力であった。

「風」という言葉を彼は何度も使った。支持するという言葉、素晴らしいという拍手、遊説場に押し寄せた人々。そうしたものが風である。風は投票箱には入らない。入るのはスタンプの押された紙1枚だけである。だから投票日の訴えは切迫していた。午後3時24分には町の名前をひとつずつ呼んだ。「万徳、徳川、亀浦の市民の皆様。北区の新しい未来のために韓東勲に投票してください。」

同日、彼は最悪の低質政治という表現とともに、李在明大統領の公訴取消の暴走を止めるために自分に投票してほしいとも記した。三つの町の名前と国全体に向けられた言葉が、ひとつのアカウントの中に並んでいた。

この日、全国で地方選挙が行われた。有権者たちは市長を選び、区庁長を選び、教育監や議員まで選ぶ投票用紙を何枚も受け取った。釜山北区甲の有権者には、もう1枚の用紙があった。国会議員補欠選挙の用紙である。その用紙で韓東勲の記号は6番であった。候補が3人なのに番号が6番なのは、若い番号が議席を持つ政党に優先して割り当てられるためである。

彼の投稿には「記号6番」「無所属北区住民」というハッシュタグが添えられていた。亀浦と徳川と万徳、彼が春から歩き回った町がすべてこの選挙区内にある。前議員が釜山市長選挙に出馬したことで空席となった議席を埋める選挙であり、メディアはここを激戦地とみなしていた。候補は

3人であった。共に民主党のハ・ジョンウ、国民の力のパク・ミンシク、無所属の韓東勲。保守候補の一本化はついに頓挫したままであった。

1月29日、彼は国民の力から除名された。4月14日、万徳2洞行政福祉センターに転入届を出した。5月15日、無所属候補として登録した。公式選挙運動の13日間のあいだは、一日数十件の投稿を上げながら路地を歩いた。除名の冬から開票の初夏まで、4ヶ月余りの時間であった。党の名なしに繰り広げてきた勝負の最後の段階が、この夜の開票であった。

この夜が決めるのは、1つの議席だけではなかった。党の外でも政治が続くのか、ひとりの人間が政党の組織に勝てるのかを判断する夜でもあった。投票箱が閉じられると、お願いの時間も終わった。もはやどんな言葉も票を動かすことはできない。残されたのは投票箱の中の紙と、数字が変わっていく開票番組の画面であった。

開票は事前投票箱から始まった。事前投票は投票日より前に票を投じることができる制度であるため、これらの箱の中の票はすでに数日前に投じられた心であった。画面の最上部にハ・ジョンウの名前が上がった。差は10パーセントポイントを超えていた。2桁の劣勢であった。並の開票であれば勝負が決したと読み取れる数字であった。もちろん開票序盤の数字は全体の一部しか語らない。そうした計算は誰にでもできる。

それでも目の前の数字は目の前の数字である。風だけでは変えられないと言っていた彼の言葉が、逆に彼を試していた。その画面を見つめていた心境は本人にしかわからないだろう。動揺したはずだ。それでも、まだ開けられていない当日投票箱を思い浮かべながら待ったはずだ。

夕方に始まった開票は夜を越し、明け方へと移り変わった。開票率が上がるにつれ、まだ開けられていない票は減っていく。残りの票が減るほど、形勢を逆転させるのに必要な偏りは大きくなる。遅れをとっている候補にとって、時間はそのように残酷に流れるのである。ところが、この夜の数字は別の方向へと動いた。格差が縮まり始めたのだ。2桁が1桁へと下がった。

夜が深まるにつれ、画面下の開票率の数字は上がり、争いは上位2人の名前の間で繰り広げられていた。縮まる歩みは遅かった。午前0時を過ぎ、日付が6月4日に変わった。お願いしていた日は去り、結果を待つ日が新しく訪れていた。それでも彼の名前はまだ下に位置していた。

開票所の外の人々にわかるのは画面の数字だけであり、その数字が新しく表示されるたびに差はほんの少し縮まったが、順位はそのままであった。同じ時刻、同じ数字を見つめながら正反対の思いを抱く人々が、この選挙区内に共に存在していたはずだ。数字を待つ側の夜は、とりわけ長かったはずである。

午前1時52分頃のことであった。2つの名前の順序が入れ替わった。差は0.8パーセントポイント、578票であった。投票した100人のうち1人にも満たない差であった。開票が始まって以来、初めて韓東勲の名前が上に上がった。当選の報を伝えた記事は、この瞬間を「ゴールデンクロス」と記した。遅れていた側の線が、リードしていた側の線を追い抜く瞬間という意味である。逆転から確定判定までは時間はかからなかった。

午前2時頃、当選確実の判定が出た。残りの票をすべて数えても順位が再びひっくり返ることはないという判定であった。判定が出た後も、集計作業は終わらなかった。最後の箱まで開けて初めて開票は終了する。

日付が変わった後、彼のアカウントは終始静かであった。前日にあれほど多くの願いを吐き出したアカウントに、逆転の明け方にも確定の瞬間にも新しい投稿は上がらなかった。マイクを握ることも、スタンプを押してほしいとお願いすることも、もはやない時間であった。その沈黙は焦りであったかもしれないし、淡々とした思いであったかもしれない。どちらであったにせよ、画面の数字を見守る以外に彼にできることはなかったはずだ。

最終集計は次のように確定した。韓東勲 35,056票、42.96パーセントであった。ハ・ジョンウ 33,664票、41.26パーセントであった。パク・ミンシク 12,866票、15.76パーセントであった。3人が獲得した票をすべて合わせると8万を超えた。ハ・ジョンウとの差は1,392票、1.70パーセントポイントであった。逆転の瞬間に578票であった差は、開票が終わった時にはそれだけ広がっていた。

夜の時間の劣勢を思い起こせば、1.70パーセントポイントは一晩かけて埋め尽くし追い抜いた距離でもあった。2桁の劣勢から始まり、1桁の追撃を経て、明け方の逆転で終わった夜であった。

当選が確定した後、韓東勲は述べた。「歴史的勝利によって釜山北区を発展させ、保守を再建できるよう後押ししてくださった偉大な釜山北区市民の皆様には感謝申し上げます。私に託された任務を、釜山市民と大韓民国国民を第一に考え、必ず完遂して見せます。」感謝は北区市民に向けられ、決意は任務の完遂に向けられていた。選挙中ずっと保守の再建を語ってきた人物らしく、感謝の言葉にも「再建」が含まれていた。

彼にとってこの当選は、北区の出来事でありながら北区を越えた出来事でもあったようだ。ハ・ジョンウは結果を受け入れた。「選挙結果を謙虚に受け止める。熱意と誠意をもって私を支持してくださった皆様に感謝申し上げます。当選された韓候補にお祝いの言葉を贈る。」短い3つの文章であり、恨み言はなかった。勝った者は「歴史的勝利」という言葉を選び、負けた者は「謙虚」という言葉を選んだ。

数字は2人の言葉よりも静かであった。彼を支持した票は42.96パーセントであった。投票した100人のうち43人という割合である。残りの57人という割合は、他の名前の横にスタンプを押した。北区が韓東勲を選んだという言葉も正しく、北区の半数を超える票が彼を選ばなかったという言葉も正しい。2つの文章は同じ夜に共に真実であった。パク・ミンシクの得票が示すように、保守傾向の票は最後まで2つに割れていた。

分裂しながらも勝ったという見方と、分裂したからこそこれほど際どかったという見方は、双方とも成り立ちそうである。組織の劣勢をボランティアが埋めたという評価もなされた。どれか一つの理由だけで説明が終わる夜ではなかった。勝った票も負けた票も同じ投票箱から出たものであり、開票が終わった後は同じ町の朝へと戻っていった。

それでも明白に見えることがある。1,392票は圧倒的勝利の数字ではない。勝った者が思いのままに使うよう手渡された白紙小切手でもない。半数に満たない支持であり、100票のうち2票に満たない差であった。見守るという条件が付された、命令に近い数字に見える。自分に投じなかった半数のためにも働けという命令であり、路地で交わした約束、北区を一番にするとっていたその約束を実際に果たせという命令である。

この命令には締め切りの日付が記されていなかった。守ったか破ったかは任期中ずっと、そして次の選挙で確認される事柄であった。

6月4日午後4時17分、彼のアカウントに新しい投稿が上がった。「今日は国会本会議出席のため、ソウルの国会に向かいます。」添えられた写真の説明は、午後1時40分、国会本館正門の階段であった。当選判定から12時間が経過する前に、彼は国会の階段に立っていた。その日彼が公開した最初の報であり最後の報が、この国会行きであった。

万徳の明け方と汝矣島の午後との間は半日にも満たず、当選の夜を楽しむ暇は長くなかったようである。1,392票が何を命令しているのか、答えを出す時間は、そのように当選当日の午後から始まったのである。

第7章 戻ってきた場所

2026年6月4日～6月12日

2026年6月5日金曜日、無所属の韓東勲議員が国会本庁に初めて登院しました。聯合ニュースと東亜日報がその足取りを報道で伝えました。前日である6月4日午後、彼のFacebookには「午後1時40分、国会本館正門階段」という説明が添えられた写真とともに一文が投稿されていました。「今日は国会本会議出席のため、ソウルの国会に向かいます。」

1,392票差の開票が明け方ようやく終わったまさにその日、彼はすでに国会の階段の前に立っていたのです。当選が確定し、彼が最初に知らせた目的地は北区の路地ではなく、ソウルの国会でした。徹夜をした者の足取りだったはずです。祝福を受けることより、仕事をしに行くことが先に始まりました。

登院とは、議員が国会に出て仕事を始めることを指す言葉です。その道に肩を並べて歩んでくれる同じ党の同僚はいませんでした。無所属とはそのような身分です。代わりに彼はこの日、北区の市民に向けた感謝の文章を投稿しました。「引き続きお訪ねし、感謝のご挨拶を申し上げます。本日、国会への初登院のためソウルに来ましたが、明日また北区に戻ります。」新しい生活の枠組みが、この二つの文章の中にすべて収まっていた。ソウルで議員の仕事をし、釜山北区に戻って住民の皆様にご挨拶を申し上げますという、二つの都市を行き来する日々です。

国会は彼にとって見知らぬ建物ではありませんでした。法務部長官時代には議員らの質問に答える国務委員として出入りし、与党代表時代には党を率いる者として出入りしました。しかし、国会議員になったのは今回が初めてです。答える立場だった者が、今や問いかけ、表決する立場となりました。補欠選挙で当選した彼が合流した国会は、他の議員たちがすでに任期の半分近くを過ごした国会でもありました。

そして2026年1月29日、国民の力はかつて自分たちの代表だった彼を除名しました。4ヶ月余りを経て、彼はその党の名もなく、一人の議員の名で同じ建物に戻ってきました。建物はそのままですが、身分はすべて変わっていました。

本庁の中には、彼を除名した党の議員たちがいました。これから同じ会議場で表決し、同じ廊下ですれ違う人々です。その傍らへと歩みを進める心境が、ただ晴れやかであったはずはありません。除名は彼が望んだことではありませんでしたが、今回の帰還は彼が票によって成し遂げたことでした。懐かしさと気まずさ、自負と孤独が一步一步の中に混ざり合っていたはずです。

復党手続きを踏み、党の名で堂々と戻ってくる帰還を描いたこともあったはず。実際の帰還はそれ以上に孤独な姿のようでした。党が開いてくれた扉ではなく、有権者が開いてくれた扉から入ってきたのであり、本会議場のどこに座ろうとも、その議席は党ではなく北区が作ってくれたものでした。それでも北区の市民に向けた文章だけは淡々としていました。感謝の言葉と、再び向か

うという言葉がすべてでした。

昨日の汝矣島ではなく、明日の北区に視線を置くことこそが、彼の選んだ心構えだったはずです。

同日、Facebookには趣の異なる写真も一枚投稿されました。「チャンネルAのインタビューを見る北区クマ。」クマのマスコット「北区クマ」が彼のテレビインタビューを見つめている写真です。当選しても、このマスコットは引退しませんでした。国会本館の階段とクマのマスコットがひとつのアカウントに並んだ一日であり、ソウルの緊張の隣には北区のユーモアが共にありました。

土曜日である6月6日は第71回顕忠日でした。国のために命を捧げた人々を追悼する日です。彼は言葉通り釜山に下り、国連記念公園で洛東江戦線を守り抜いた英雄たちを偲んだと記しました。顕忠日の文章ではこのように綴っていました。「国家の品格は、その方々を漏れなく記憶することから始まります。」国のために命を捧げた方々が、陣営や政治的な損得によって選択的に追悼されてはならないという文章でした。

礼遇の死角地帯がまだ残っているとし、立法で解決できることがあるならば決して疎かにしないとも述べました。文章には、新しい職場のお部屋番号が付された約束がありました。「議員会館1022号室の扉を、国家有功者の皆様とそこご家族の皆様にも常に開けておきます。」議員となって初めて迎えた顕忠日に彼が提示した約束は、扉を開けておくという約束でした。

日曜日早朝には、登山に出かけた市民の皆様にご挨拶を申し上げたと記しました。日が昇る前から始まった挨拶でした。華明生態公園の「新万徳サッカー会」とバドミントン同好会を訪れ、セマウル運動提唱56周年を記念する「オウルリム（和合）ハンマダン」では釜山市民の皆様にご挨拶を申し上げたと伝えました。一日に複数の場所を巡る日程でした。

月曜日には亀浦畜産物卸売市場を訪れ、「とても温かく迎えていただきました」と記し、亀浦大橋交差点や南山丁駅の交差点にも立ちました。徳川ロータリーでは、ボランティアの一人が今も感謝の挨拶を続けておられたため、一緒に挨拶を申し上げたと伝えました。火曜日には大韓老人会北区支部でお年寄りの皆様にご丁寧なお辞儀（クンジ）を捧げ、北区報勲会館には二日間にわたって足を運びました。グリーンコア交差点にも立ち、水曜日には新万徳農協交差点で挨拶を申し上げました。

Facebookには感謝の言葉が一日に何度も投稿されました。選挙の時に歩んだ道と大きく変わらない動線です。ただ、今は票をお願いする歩みではなく、票に感謝する歩みでした。

同じ一週間、同じFacebookには全く温度の異なる文章が交互に投稿されました。彼は、李在明大統領が記者会見で自身の事件の公訴取消を望む意思を明確にしたと記しました。公訴取消とは、検察が提起した起訴を取り下げて裁判を停止する手続きです。そのような事態が起きれば弾劾に立ち上がると、自身が国民と共に先頭に立つと述べました。「戒厳が弾劾なら、公訴取消も弾劾です。」

当選からわずか数日で、彼の語り口は政府と正面から対峙していた以前のそのままに戻っていました。交差点での感謝の挨拶と、大統領に向けた警告文が、わずか数時間の間隔でひとつの画面を通り過ぎました。同じ手が両方の文章を書きました。一人のアカウントとは信じがたい落差でした。

6月11日木曜日には、憲政会の長老方を訪ねて挨拶しました。憲政会とは、国会議員を務めた長老たちの集まりです。国会に戻ってきたばかりの議員が、この建物をはるか昔に通ら過ぎた先輩方の話に耳を傾けたのです。彼はこう記しました。「憲政会の長老先輩方のお言葉を銘記し、良い政治、保守再建を必ず成し遂げます。」

釜山地域メディアKNNが投稿した動画のタイトルには、長老たちの極賛が相次ぎ、笑みを隠しきれなかったという文言が添えられていました。「極賛」という言葉も「笑み」という言葉も、彼ではなくメディアが選んだ言葉でした。

インタビューも相次ぎました。彼は6月11日付の読売新聞の記事の韓国語訳全文をFacebookに転載しました。日本の新聞はソウルの呉世勲と釜産の韓東勲を「二人の勲」と括って呼び、瀕死状態にあった保守が再建の足がかりを得たと報じました。この記事転載したのは彼自身でした。外部の視線が自身の勝利をどのように読み解いているのかを見せたかったのでしょう。

当初は無謀だとの評価を受けた出馬が、募金とボランティアに支えられた草の根選挙によって逆転したという回顧も掲載されていました。記事には、除名が決定した1月29日の記者会見で彼が「必ず戻ってくる」という言葉を残したという一文もありました。その言葉通り、彼は戻ってきました。ただ、どこに戻ってきたのかが残された問題でした。国会には戻ってきましたが、党へはまだでした。

同日、彼が共有した朝鮮日報のインタビューのタイトルは、その問いと答えを並べて掲げていました。「国民の力への復党？ 民心の時計に合わせる。」彼を除名した党に戻るのかという質問は、どこへ行っても彼について回ったはずです。彼は答えを急がず、「民心の時計」という言葉の裏に先送りにしました。拒絶でも承諾でもない答えでした。時計の針を握っているのは自分ではなく有権者だという意味に見えます。

同じ6月11日、Facebookには全く異なる文章がもう一つ投稿されました。自身が出国禁止状態にあるという事実を明かした文章です。出国禁止とは、捜査などを理由に人が国外へ出られないよう制限する措置です。彼はこう記しました。「民主党の政治特検が何の根拠もなく、ただ親民主党団体の誣告性告発状一枚を根拠に私を出国禁止にし、何もしねまま出国禁止を延長しましたが、明日6月12日が延長された出国禁止の満了日です。」

釜山北区甲選挙で傷をつけようとする試みだったとしか見ようがないとし、これまで連絡すらなかったと述べました。「また延長するのか見てみましょう。延長しなくても、延長してもコメディです。」彼の主張通りであれば、出国禁止は選挙期間中に始まり、当選後まで続いていました。票を得るために歩き回っていた間も、票を獲得した後も、国外へ出ることができない人物だったという話です。すべて彼の投稿に込められた彼の主張です。

出国禁止の理由についての特検側の説明は、その文章には含まれていませんでした。

翌日である6月12日の朝、彼が共有した聯合ニュースTVの対談のタイトルは、彼を激戦地から生還した国会議員と呼び、そのタイトルの末尾にも「復党」という単語が付されていました。彼はこの対談で、公訴取消に関連して李在明大統領と鄭清来代表の話をしたと記しました。午後には、特検が出国禁止を再び延長したという文章が投稿されました。「李在明政権の政治特検が『稚拙な意地張り』をしています。」問いも投げかけました。

「韓東勲が3回も出国禁止にされなければならない理由は何ですか。」そしてこのように記しました。「韓東勲を落選させようと出国禁止にしておきながら、選挙が終わってそのまま取り下げようとするのは恥ずかしいのですか。」長老たちの極賛と特検の延長通知の間は、わずか一日でした。当選の朝と捜査の影が同じ週に訪れていたのです。

同日、北区に向けた文章も忘れませんでした。「北区の万徳、亀浦、徳川の市民の皆様、ありがとうございます。一生懸命頑張ります。」万徳と亀浦と徳川は、彼が2ヶ月以上にわたって歩き回った街の名です。特検に向けた問いと市民への感謝が、数時間の間にひとつのアカウントを通り過ぎました。国会での闘いが corporate どのように広がろうとも、挨拶だけは欠かさないと言わんばかりに、感謝の文章はこの週の最初と最後に間違いなくありました。その二つの文章の間が、無所属議員の一日でした。

戻ってきた国会で、無所属議員の居場所はどこなのか。党の会議室も、党論という垣根も彼にはありませんでした。あるのはソウルと釜山を行き来する身体、そしてその身体を国会まで送り届けた北区の投票用紙でした。その紙一枚一枚の重みを改めて問い直さなければならない日々が、登院翌週の彼を待っていました。

第8章 一枚の投票用紙の重み

2026年6月13日～6月22日

「新しく作った名刺です。」2026年6月18日、韓東勲のFacebookに投稿された文章は、こう始まります。「どこでも亀浦、徳川、万徳の名を一度でも多く口にして知らせるため、亀浦、徳川、万徳を入れました。誠心誠意を尽くします。」名刺は、初めて会う人に手渡す一枚の紙です。名前と肩書と連絡先だけを書いても名刺としての役割を果たします。その狭い紙に、初選議員は街の名を三つ、さらに刻み込みました。

ソウルの会議室であれ国会の廊下であれ、名刺を受け取った人が亀浦と徳川と万徳という名を一度は読み、一度は耳にするようにとの工夫です。三ヶ月前までは彼にとって馴染みの薄かったはずの街の名が、今や彼の指先から真っ先に出て行く名となりました。国会議員の名刺は遠くまで届きます。長官のデスクにも、記者の手帳の傍らにも、初めて会った公務員のポケットにも届きます。

それらの手渡しのたびに、釜山北区の三つの街が共に手渡されるのです。当選後も彼の文章には「北区の未来、最後まで韓東勲」というフレーズが添えられていました。名刺は、その誓いを紙の上に載せたものでした。

名刺に関する投稿が上がる五日前の6月13日土曜日、彼は釜山にいました。この日一日だけで10件の投稿がアカウントに積み上がりました。早朝には自分が出演した放送対談の記事をシェアしました。「『強力な0.5選』韓東勲議員に聞く」というタイトルでした。補欠選挙で当選し、4年の任期の半分を務めることになった議員を0.5選と呼びますが、その前に「強力な」という修飾語がついたのです。夜が明けると、釜山での一日が始まりました。

「都市開発公社アパートの草刈りの約束、進行中です。」選挙の際に住民と交わした約束が当選後も進行しているという5単語の報告でした。妻と共に徳川総合社会福祉館で麺類の給食ボランティアをしたという投稿が続き、北区の端午の行事で餅つきをしたという投稿、山岳会の市民に挨拶をしたという投稿、早朝に三寺巡礼へ出発する雲水寺の市民にお会いしたという投稿が続きました。夜には飛行機を降りるやいなや、華明生態公園のナイトマーケットへと向かいました。

洛東江のほとりなのでとても涼しくて気持ちが良いと書きました。この日には守るべき約束がもう一つありました。万徳2洞に転入した翌日、共に夜間巡回を回った自主防犯隊の青年が結婚する日でした。そのとき必ず行くと約束したがそれが今日だったと、幸せを祈ると彼は書きました。二ヶ月前に路地で交わした一つの約束が、こうして守られました。

日曜日にも月曜日にも投稿は続きました。ビデオ通話で当選の挨拶をし、相互フォローをお願いする挨拶も残し、釜山北区青年就職希望コンサートやゲートボール大会で市民に会ったという知らせが短く短く投稿されました。この頃、彼の投稿には「保守再建」という言葉が繰り返し添えられました。6月15日には彼が先輩と呼ぶ柳寅鶴、林福鎮の二人のお言葉を伝える投稿が上がり、朴相

熙、姜秀林のお言葉がそれに続きました。

体は北区の会場を回り、言葉は保守陣営全体に向け置く日々でした。

6月17日水曜日には、裴俊英、金健、金叡智の三議員が主催した国会討論会に行ってきたと知らせました。党に属さない議員の国会の日課は、このような招待と出席によって組み立てられます。党の会議がない人にとっては、同僚議員たちが開く討論会の一つひとつが、共に働く人々と出会う通路であったはずです。同じ日、アカウントには「私たちの亀浦市場、おめでとうございます！」という短い祝福も投稿されました。ソウルの討論会場と釜山の市場が、数時間の間隔で同一のアカウントに並べて記されていた日々です。

名刺を紹介した6月18日木曜日、同じアカウントに重みの異なる二篇の投稿が共に上がりました。朝7時47分の投稿は、こう始まります。「『事前投票を廃止し、本投票期間を延長すること』が私の長年の持論です。」一年前の2025年3月の記事が添えられていました。

法務部長官として働いていた際に手開票が必ず必要だという意見を出し、非常対策委員長や党代表を務めながら事前投票用紙に管理官が直接押印するようにしようと提案し、事前投票を廃止する代わりに本投票期間を延ばそうと公開で主張してきたという内容です。事前投票は決められた選挙日より前にあらかじめ投票できるようにした制度であるため、廃止しようという主張だけを聞くと、利便性を損なおうとする言葉に聞こえるかもしれません。

そのため、彼の主張には本投票期間の延長が常にセットで添えられます。投票する機会はそのまま守りつつ、管理を信頼できる方式で行おうというのが彼の長年の答えでした。その記事の中の彼の言葉には、一つの比喻が含まれていました。「日の当たらない日陰ではカビが繁殖しやすい。」選挙管理委員会の隅々まで日の当たらない場所がなくなるよう、カーテンを開け放たなければならないということです。

午前11時45分の投稿は、前日に出された発表を書き写しながら始まります。「昨日、趙賢旭・真相究明委員長の発表により、今回の参政権侵害事態の主な原因の一つである投票用紙の印刷縮小について、魏哲煥・中央選管常任委員が報告を受けていた事実が確認されました。」続いて彼は、報告を受けながらも事態が事務総長の専決で処理され、中央選管委員長には報告すらいかなかったとされている発表内容を伝えました。要求は明確でした。

彼の投稿によれば、魏哲煥常任委員はこのとき選管委員長職務代理を務めていましたが、まさにその人物に今回の事態の責任を即刻問うべきであり、野党は弾劾訴追に乗り出すべきだということです。国民の参政権を疎かにした選管責任者は弾劾にまで至り得るという前例を打ち立てるべきだと彼は記しました。民主党がこの弾劾訴追に同意するかどうかを国民と共に注視するという警告も添えました。

言葉だけで参政権は与野党の問題ではないと言いながら、李在明大統領が指名した常任委員だからと、大統領の司法研修院の同期だからと庇い立てするならば、国民の指弾を免れないだろうという一文もありました。1,392票差で国会に送られた人物にとって、投票用紙一枚がどのような重み

を持つものかは、計算ではなく実感であったはずです。春から夏にかけて路地で手を握り合った人々のおもいが、その薄い紙に託されて国会まで届いたからです。

週末にも地元の挨拶と制度の話は並行して流れました。金曜日である6月19日には徳川第一教会で開かれた「6・25愛国祈祷会」で挨拶をし、亀浦市場を再び歩きました。今の世界が第一次世界大戦の直前と似ている点が目立つという長年の考えを記し、そうした内容を分かりやすく重々しくなく書いた一冊の本を薦めたりもしました。日曜日には万徳の敬老堂を訪ね、短い投稿一つがこの頃の空気感を物語っています。

「選挙が終わってまた来たのに、またご飯を出してくださるのですね。」選挙が終わってもご飯を出してくれる人々があり、選挙が終わっても訪ねてくる政治家がいました。「土曜日の朝、徳川のカフェです」という投稿のように、街の朝を知らせる投稿も欠かさず挟み込まれていました。同じ週末、彼はローカル放送KNNが制作した動画を、言葉を添えずにシェアしました。選管の疑惑が明らかにされる中、1年前の韓東勲の発言が再び注目されているというタイトルの動画でした。

候補時代の彼は制度を批判する人物でした。文章で、インタビューで、カーテンを開けよと語ることで、そのとき彼にできたことでした。言葉は聴く者がいて初めて力となり、票を得てこそ資格となります。北区の有権者たちが去る6月3日にその資格を与えたのです。国会議員は違います。法律案を提出できる人物、言葉を条文に変えることが職業である人物です。

6月22日月曜日、彼は議員となって初の法案を提出しました。監査院法改正案、選挙管理委員会を監査院の職務監察対象に含めようという法案です。韓国経済新聞とフィナンシャルニュースがこの発議を報じました。国会議員が扱うことのできるテーマには限りがありません。経済、教育、福祉、国防。その数あるテーマの中から彼が第一に選んだのが選挙でした。

自分を国会まで送り出した手続き、投票用紙が印刷され、管理され、数えられるその手続きを最初の大仕事としたのです。監査院は国の機関が仕事を正しく行っているかを確かめる機関であり、職務監察はその機関で働く公務員の仕事を覗き込む監査です。選挙を管理する機関もその視線の下に置こうというわけですから、カーテンを開けよと言っていた彼の長年の主張は、こうして条文のかたちを取り始めたのです。

ただ、反対側には軽視できない論理が立ちはだかっています。選挙管理委員会は憲法が直接設置した独立機関であり、選挙を管理する機関が他の国家機関の監察を受けることになれば、その独立性が揺らぎかねないという懸念です。初の法案は、その二つの論理が向き合う真っ只中へと分け入っていきました。法案は一人では提出できません。

国会法は10人以上の議員が共同で名を連ねて初めて発議できるよう定めているため、党を持たない議員はその名前集めから党の外で試みなければなりません。発議は始まりに過ぎないものでもあります。法律となるには委員会での審査と本会議での表決が控えており、6月22日の改正案はまだ受付を済ませたばかりの書類に過ぎませんでした。

法案を提出した月曜日にも、アカウントには釜山に関する投稿が並んで上がりました。華明生態公園で開かれたワンアジアフェスティバル・パークコンサートで市民と会ったという投稿、2026釜山北区バドミントンディビジョンリーグに行ってきたという投稿、亀浦2洞青年会の助け合いチャリティービアホールで挨拶をしたという投稿です。徳川ロータリーで毎日お見かけしていた「靴の兄貴」に再会したという投稿もありました。この十日間の短文の投稿は、ほぼ同じ言葉で締めくくられていました。

「誠心誠意を尽くします。」候補者時代に使っていた結びの言葉が、議員になった後も shared/そのまま shared...そのままでした。「乾杯。誠心誠意を尽くします。」という二言だけの投稿もその間に挟まれていました。ソウルでは選挙制度を改めようという法案が受け付けられ、釜山ではバドミントンコートと生態公園での挨拶が続く一日でした。

名刺と法案はどちらも紙です。名刺は手渡せばそれで己の役割を果たしますが、法案は提出することが仕事の始まりです。党の名なしに提出した法案が委員会の敷居を跨ぎ、本会議の表決まで生き残るには、他の議員たちの心を掴まなければならない、その議員たち一人ひとりもまた結局は投票用紙の上で選ばれた人々です。長年の持論だと彼は記しました。その長年の持論が、今や国会の受付番号を付されることとなりました。

名刺が知らせるものは名前であり、法案が変えようとするものはルールです。名前は十回口にすれば知れ渡りますが、ルールは表決に打ち勝って初めて変わるのです。言葉が法律となるには、他に何が必要なのか。この問いがまだ静まりきらないうちに、法律の言葉で問い質さなければならない次の問いが、国会の外の工場から近づきつつありました。

第9章 工場と法の問い

2026年6月23日～6月26日

2026年6月26日金曜日、韓東勲のフェイスブックにひとつの長文が投稿された。無所属議員として登院してから3週間が過ぎた金曜日だった。前日の夕方に投稿した文章を、わずか1日で再び押し上げたのだ。タイトルからして問いかけだった。「大統領がトップに圧力をかけて決定したなら『はい』と従わなければならないのですか」。問いの後には警告が添えられていた。

取締役たちが反対しなければ、改正商法の忠実義務違反で法的責任を負うことになるという警告だった。サムスン電子とSKハイニックスが建設することになる半導体第2クラスタ、その巨大な工場がどの土地に建つべきかをめぐる文章だった。

李在明政権がサムスンとSKのトップを呼び出し、半導体クラスタを湖南に建設するよう圧力をかけていると彼は書いた。圧力に屈したトップたちが受け入れれば、政府は企業が自ら決定した投資だと発表するだろうとも述べた。そうしながら彼は朴槿恵政権時代のミル財団とKスポーツ財団の事件を引き合いに出した。あの時、企業が「自発的に」寄付金を出したと言ったことと何が違うのかと彼は問うた。

その事件が朴槿恵政権を崩壊させる引き金の一端となったということだ。現在の圧力を指して「88年式の時代錯誤的な手段」という言葉も使った。政府とトップたちの間で実際にどのような会話が交わされたのか、政府側の説明はどのようなのかは、その文章には書かれていなかった。どこまでも彼が描いた絵にすぎない。

文章の重みは法律の条文に込められていた。会社には取締役という人々がいる。株主が託した会社の重要な事項を取締役会に集まって決定する人たちだ。商法はこの取締役たちに忠実義務を課している。自らの利益ではなく会社の利益のために働くべきだという義務だ。改正された商法は、その義務の対象に株主を書き加えた。取締役は会社に対しても、株主に対しても忠実でなければならないという意味だ。

韓東勲はこの条文を政府側へと突きつけた。政治の圧力に屈して株主に損害となる決定を下せば、それこそが忠実義務違反であり、取締役たちが法的責任を負うことになると書いた。サムスン電子とSKハイニックスは500万人の国内個人投資家が株式を保有する会社であり、国民年金が保有する2社の株式だけでも先月基準で260兆ウォンに上るとも指摘した。そして両社の取締役会に向けて要望を書き残した。

取締役には多数の株主のため、企業の未来のために決定を下す義務と責任があるのだから、強圧に反対せよということだ。そのことで政権からの報復があるならば、自ら進んで保護するとも書いた。「毅然として反対してください」。

少額株主を守るとして商法改正を押し進めたのは、他ならぬ李在明政府だと彼は書いた。その政府が作った条文を、その政府を測る物差しとして突き返したのだ。検事であり、法務部長官であり、党の代表だった人物が、今や党も組織もない1選議員として政治と向き合っている。彼の手に残された武器は法の言葉だった。権力と企業の間で起きている出来事を、義務と責任と違法という言葉に置き換えて書き記すこと、それが身についたやり方だったのだろう。

半導体の話は2日前から続いていた。6月24日水曜日の午後に投稿した最初の文章で、彼は民主党代表選をめぐる争いを「明清大戦」と呼び、半導体工場の立地決定がその戦いの「弾丸」として使われてはならないと書いた。政権が第2クラスタの湖南行きを既成事実化していること、龍仁のクラスタが完成してもいないのにもう飽和状態だと主張していることが、彼の挙げた根拠だった。

彼は2019年のSKハイニックスと2023年のサムスン電子による龍仁への投資を例に挙げた。企業の判断が先にあり、政府はその判断を助けたということ、今日の半導体大国はそうにして作られたということだ。半導体投資の成否は10年、20年後に判明するのに、任期5年の政府が政治的計算で立地に介入すれば、その費用とリスクは企業と国民と次の世代が背負うことになるとも述べた。

半導体は国の未来がかかった産業なのだから、政治の論理で扱ってはならないというのが彼の一贯した主張だった。同じ文章を彼は3日間にわたって3回投稿した。一度発言して済ませる問題ではないと考えたようだ。

ひとつの工場を建てようとするれば、多くのものが伴わなければならない。途切れることのない電気が届き、工場を動かす水が届き、働く人と部品を供給する企業が近くに集まらなければならない。工場が来れば雇用が生まれ、去っていった若者たちが戻ってくる。だからどの都市も巨大な工場を待ち望むのだ。

人と金が首都圏に集中する国において、その待ち望む気持ちは切実であり、政府が乗り出して産業の地図を均等に描くべきだという地域均衡発展の論理は、その切実さの上に成り立っている。韓東勲も均衡発展が重要な政策目標である点には同意すると書いた。彼が問い詰めたのは順序だった。企業が先に秤にかけ、政府が助けるのか。それとも政府が先に決め、企業が従うのか。

彼が出した答えは、他の地域の1位産業を奪い取るのではなく、その地域が1位になれる産業を育てようというものだった。釜山の議員である彼が、工場を待ち望む地方の思いを知らなかったはずがない。それでも彼は企業の判断が先だと書いたのだ。

その週に彼が繰り広げた論争は半導体ではなかった。6月23日火曜日、彼は金亨東議員が主催した国公立大学統合モデルの行事に足を運び、韓起鎬議員が主催した安保と報勲をテーマにした行事にも参加したと報告した。釜山の個人タクシー運転手たちの集まりである一心同友会を訪れて挨拶したという投稿もこの日に上がった。選挙の後に再び何うと約束していたという言葉も添えて。

1選議員の平日は、国会の会場と釜山の路地裏の両方にまたがっていた。同じ日、フェイスブックには長文の反論記事も掲載された。自分を指名批判した宋永吉議員の放送インタビューに答えた文章だ。

戦時作戦統制権は、戦争が起きた際に軍の作戦を指揮する権限である。現在は韓国とアメリカが共同で構成する連合司令部にこの権限があり、これを自国軍に移管することを戦作権転換と呼ぶ。急いで移管すべきだという側と準備が先だという側が長く対立してきた問題だ。彼は宋議員がインタビューで挙げた例をひとつずつ検証した。

戦作権を自ら保持していたアフガニスタンの政府がどのように崩壊したかを考えてみるよう促し、アデン湾での海賊対応のような作戦と核を保有する相手との全面戦争は規模も性質も異なると指摘し、60年前のベトナムでの事例が今日の朝鮮半島にそのまま適用されるわけではないと記した。長期的に戦作権の返還を受けること自体には反対しないとし、問題視しているのは焦燥に駆られた転換の時期と方式であると彼は書いた。

文章の締めくくりはこの一文だった。「国益は自主派の虚勢と幻想に優先する」。

6月24日午前3時52分にも投稿があった。黄海で北朝鮮軍に射殺された公務員、故イ・デジュン氏の話だった。遺族に謝罪する気もなく捏造起訴云々と大声を上げる民主党議員たちを見ていると呆れ返ると彼は書いた。李在明政府の圧力がこの事件の真相究明を阻み、検察が控訴を放棄するよう追い込んだとも主張した。

相手側が聞けば異なる言い分のある話であり、これもまた彼の文章に込められた彼の主張にすぎない。この文章は翌日、もう一度投稿された。午前3時を過ぎた時刻に長文を書く日々が続いていた。怒りなのか焦燥感なのか、眠りを追い払う何かが存在していたのだろう。

6月25日木曜日には、日本の朝日新聞とインタビューを行ったという知らせを投稿した。朝日は選挙期間中に北区の遊説現場まで直接訪れて取材・報道した新聞だったが、選挙が終わった後に再びインタビューを申し込んできたため、喜んで応じたと彼は書いた。釜山北区の路地を回っていた無所属候補を、隣国の新聞が覚えていて再び訪ねてきたのだ。

党の名を借りずに戦った勝負が、国外でも話題になっていたようだ。特別検察官が自分を出国禁止にしたと自ら明かしてから2週間が過ぎた頃の出来事でもある。その週、彼は国会議員会館10階を清掃してくれる清掃スタッフや担当者たちと昼食を共にし、苦情や要望を聞いたという投稿も行った。大統領と企業トップを語る文章と、清掃労働者たちと共にした昼食の話が、ひとつのアカウントで隣り合っていた。

そして金曜日が訪れた。6月26日、彼の足取りは北区の路地にあった。敬老堂へ向かう途中で亀南小学校の子供たちに偶然出会い、その投稿には「再会したタルコンイ男」という言葉が添えられた。徳川1洞行政福祉センターで開かれたセマウル文庫26周年記念式で挨拶し、シルバーベル福祉館のお年寄りの遠出のお見送りに挨拶をし、万徳川再生イベントで市民たちと出会った。「韓東勲だ」というタイトルのショート動画もアップロードされた。

「誠心誠意を尽くします」。この言葉がその日の投稿に何度も記された。ソウルに向けては条文と数字で詰問し、北区では子供たちやお年寄りに挨拶する一日だった。

夕方には短く鋭い投稿がひとつ上がった。政府の政策室長がサムスンとSKの投資問題をフリーアナウンサーのキム・アジュン（金総洙）に真っ先に報告しに行ったと主張し、彼は問うた。「キム・アジュンがサムスン、SKの大株主ですか」。夜10時55分には、画面が再び半導体の数字で埋め尽くされた。光州と全南に電力と用水が十分に存在するから半導体を移転するという話は本当なのかと、彼は李在明大統領に向けて問い詰めた。

太陽光発電は日が差してこそ電気が作られるが、最新の半導体工場は100分の1秒たりとも電力が変動してはならないこと、クラスタを稼働させるには1日約43万トンの工業用水が必要とされるが、その水を供給すべき栄山江流域は今でも水不足であると記した。湖南の再生可能エネルギーだけにこだわる理由が何なのか、釜蔚慶や江原には安定した原発による電力もあると述べた。

数字と単位が敷き詰められた文章だったが、それらの数字もまた彼が選び抜いてきた根拠である。文章の最後で彼は、金の卵を産むガチョウの腹を割くような真似を阻止しなければならないと書いた。敬老堂へ向かう途中の挨拶と、真夜中の工業用水の計算が、同じ日付の下に並べられていた。

ひとつの工場が建つ場所を決めることには、電気がかかり、水がかかり、人々の暮らしがかかり、10年後20年後の時間がかかっている。その決定は誰が下すべきなのか。大統領か、トップか、取締役会か、株式を持つ500万人か。韓東勲は商法の条文を挙げて自らの答えを出したが、ひとつの工場の場所は誰が決めるべきかという問いそのものは、条文の外側にそのまま残されていた。6月の最後の週末が近づいていた。

第10章 制服と電気料金

2026年6月27日～7月3日

6月28日日曜日午後5時過ぎ、韓東勲のフェイスブックに投稿が寄せられました。「今日は第2延坪海戦勝戦24周年です。」このように始まる文章でした。2002年6月29日、国中がワールドカップの歓声に沸き立っていたあの日の朝、チャムスリ357号の将兵たちが西海北方限界線を最後まで守り抜いたと彼は記しました。そして6人の名前を階級とともに一人ひとり呼び上げました。

尹永夏少佐、韓相国上士、趙天衡上士、黄道顕中士、徐厚源中士、朴東赫兵長。6人の名前の前には、すべて故人を意味する文字が付されていました。6人の方々がその海から帰ってくることができませんでした。

第2延坪海戦は2002年6月29日、西海の延坪島沖で発生した南北海軍の交戦です。北方限界線は西海に引かれた南北間の海の境界線です。この線の近くでは以前にも大小の衝突がありました。あの日朝、北朝鮮の警備艇がその線を越えて奇襲攻撃を仕掛け、チャムスリ357号という小さな高速艇が立ち向かって戦いました。海は守られましたが、6人の将兵が命を落としました。

あの日夕方、我が国のワールドカップ3位決定戦を控え、街は赤い服と応援の歓声で溢れかえり、歓声と砲声が同じ日にありました。歓声があまりにも大きかったため、あの朝の海がしばらくの間、国の記憶の後回しにされていたという話も長く語られていました。24年の歳月が流れた日曜日、当選一回の議員がその6人の名前を再び呼び上げました。彼はこの日を勝戦記念日と呼びました。

負けた戦いではなく、守り抜いた戦いとして記憶しようという意味だったのでしょう。

文章は記憶と礼遇の物語へと続きました。「一国の品格は、勇気を出して献身した方々をどのように記憶し、どのように礼遇するかにかかっています。」国家が最後まで共にあるという信頼を差し上げることが報勲の出発点だとも記しました。報勲とは、国のために戦って負傷したり世を去った人とその家族を国が世話することです。制服を着た人は国の呼び出しを受けて危険な場所に立ちます。

国が最後まで共にあるという約束があつてこそ、その呼び出しに応じることが正々堂々たるものとなり、報勲はその約束を守ることです。彼は6人の方々の犠牲は時間が流れたからといって報われるものではないとし、報勲の死角地帯を減らし、礼遇を現実に見合うよう正す仕事を最後まで見届けると言って文章を締めくくりました。ずっと前に定めた基準で今日の痛みを測らないという意味として読み取れます。死角地帯とは、制度が行き届かない陰を指す言葉です。

助けが必要であるにもかかわらず、条件が合わずにその陰に立たされている人々がいます。24年といえば、あの日生まれた赤ん坊が大人になっても余りある時間です。遺された家族や戦友たちはその時間の間、毎年6月末をあの海と共に過ごしてきたはずです。

同じ日の明け方には、『時事ジャーナル』とのインタビューを知らせる投稿も上がっていました。「国家のために献身した方々の傷は、目に見えるものだけではない。」インタビューで彼が語った言葉です。体に残った傷痕は目に見えます。しかし、戦場の記憶が数十年のちの夜中にも蘇ってくる心の傷は表に現れません。そのような病気を医師たちは外傷後ストレス障害と呼びます。

トラウマという言葉も、大きな衝撃が心に残した傷を指す言葉です。彼は米国や英国などが退役軍人のトラウマやメンタルヘルスの問題を個人ではなく国家が責任を負う領域とみなしているとし、我々も報勲の範囲を体の補償から心の回復まで広げなければならないと語りました。体の傷に補償と手術があるように、心の傷にもそれに見合うケアがなければならないという意味です。

報勲病院の心癒やしセンターを拡充し、委託病院や地域の精神保健機関を繋いで、どこに住んでも心理カウンセリングと治療、家族支援まで受けられる体系を作ろうという提案でした。報勲病院は大都市の数箇所になく、遠方に住む人は国が定めた近所の委託病院を利用します。心の治療は一、二回の診療で終わらず長く通わなければならないため、住んでいる場所の近くに相談と治療の門戸がなければならないという話です。

傷ついた人の側に寄り添ううちに共に疲弊していく家族まで、ケアの視野に入れました。記念日の誓いと診療室の計画が、同じ日に一つのアカウントに並んでいました。

3日後の7月1日未明1時50分、今度は野球場で起きた出来事について投稿しました。高校野球の試合で5・18光州民主化運動を相手チームへの野次ネタにした出来事があり、若い選手たちには6ヶ月の出場停止処分が下されたところでした。出場停止とは、定められた期間試合に出場できないようにする罰です。彼の文章は短く明瞭でした。野次は「間違ったことです」。

しかし、「若い生徒たちに6ヶ月の出場停止を課すのは過度です」。そして、一文を独立させて記しました。「若い生徒たちなのです。」

5・18光州民主化運動は1980年5月、光州市民が軍事政権に立ち向かって民主主義を要求し、戒厳軍の銃剣により多くの命が失われた出来事です。46年が過ぎた今も癒えない傷です。他人の大きな悲しみを応援合戦のからかいの種にすれば、その悲しみを抱えて生きる人々が再び傷つきます。その傷を嘲笑する言葉はこれまで概ね政治の極端な層から出ており、そうした言葉が出るたびに保守政党は苦境に立たされました。

過ちを過ちだときっぱり言い切る声は、遅かったり小さかったりすることが多々ありました。ところが、釜山で当選した保守政治家が未明に投稿した文章で、躊躇することなく過ちであると釘を刺しました。光州の票がかかった地域でもなく、支持層の誰もが喜ぶ言葉だという保証もありませんでした。善悪の判断を陣営の顔色よりも優先したと考えられます。同時に、彼は罰の重さも吟味しました。

「過ちである」という判断をまず前に置き、その上で初めて罰の話を取り出す順番でした。6ヶ月といえば、高校の選手にとっては1シーズンがまるごと消え去りかねない罰です。放送で「戦車で踏み潰すべきだ」と発言した成人の放送関係者は謝罪だけで放送を続けているのではないかと彼

は記しました。大人の過ちには鈍かった天秤が、子供たちの過ちの前でだけ苛酷になることを問題視した主張です。

過ちは過ちとして見極めるものの、罰は年齢や状況を考慮して科そうという話でした。5・18の傷に心を痛める側と若い選手たちを心配する側、どちらか一方だけに味方しなかったため、両方から不満を持たれかねない文章でした。それでも彼は、双方の判断をともに記しました。

翌日の7月2日には、三文だけの短い文章が投稿されました。「77法を作れば、私のような政治家は受益者になるでしょう。しかし、断固反対します。憲法と常識の問題だからです。」その頃、政治界では「77法」と呼ばれる法律を作ろうという話が行き交っていました。その法律が何をどのように変えようとする法律なのか、彼はこの文章の中で解き明かしてはいません。文章が伝える事実は明瞭です。

その法律ができれば自分のような政治家が得をするということ、それにもかかわらず反対するということです。「断固として」という言葉は、自ら退く道をあらかじめ断つ言葉です。裁判では裁判官が自分と利害関係のある事件を担当しないのが長年の原則です。自分の事柄の前では誰もが目が眩むからです。政治にはそうした原則が通用せず、国会議員は自分にとって有利か不利かの法律を常に自ら扱うことになります。

そのため、自分が受益者になるとあらかじめ明かした上で反対する文章は目を引きまします。憲法は国の最高の約束であり、常識は市井の人々の目線です。彼は損得の代わりにその二つを反対の理由としました。反対を大きく叫ぶこと自体が評判を築く計算であり得るという読み解きも、もちろん可能です。本心まで見通す術はありません。ただ、この一週間、彼が選んだ言葉を並べて見ると、筋が一つにまとまります。

制服を着た人々のみえない傷を気遣い、陣営にとって得にならない光州の話にあらかじめ線を引いた人が、今度は自らが得をする法律を退けました。目の前の損得の外側に判断の基準を立てておこうとする姿勢です。計算が全くなかったわけではないでしょうが、憲法と常識という物差しを真っ先に差し出した手は、信念の側により近く見えます。

7月3日金曜日夜10時15分、今週最後の投稿が寄せられました。「産業用電気料金を地域によって差別化し、非首都圏の産業用電気料金を首都圏より引き下げなければなりません。」産業用電気料金とは工場や企業が使う電気の価格であり、差別化とは差を設けて異なって定めるという意味です。その価格を地域によって異なって設定し、首都圏外の工場にはより安く設定しようというものです。

電気を作る発電所は地方や沿岸部に多いのに対し、その電気を多く使う場所は首都圏に集中しています。彼は既に法制化はなされているのだから先送りする理由はないとし、欧州など他の国で既に実施されているのだから副作用の懸念もないと記しました。法は既に存在するので実行のみが残されているという回答と、他の国が既にやっているのだから恐れることはないという回答。反対側の懸念をあらかじめ遮る二つの回答でした。

電気代が安くなれば、企業が工場を建てる場所を選ぶ際に地方が目に残るようになります。工場が来れば雇用がついてきて、収入があれば人が離れることはありません。職を求めて故郷を離れる若者たちの物語は、釜山でも見慣れないものではありません。勿論、価格を分けて設定することには常に負担が重くなる側が生じるものであり、首都圏の工場にとってはありがたくない話かもしれません。

人、資金、工場が首都圏ばかりに集中する流れを、地方の都市は長く見つめてきました。釜山もその外側にあり、釜山北区甲はその釜山の一角です。金曜日の夜に出された一週間の最後の言葉が電気料金でした。

6日間のうちに、彼は24年前の西海の海、46年前の光州、名前すら聞き慣れない法案、そして工場の電気料金について順に語りました。遠く離れているように見える話です。重ね合わせて見ると、問いは一つに集約されます。国は誰をケアするのか。その費用は誰がどのように分担するのか。

海で国を守った人の心の病を国が責任を負うことも、首都圏と地方の工場が電気代を異なって支払うことも、国が集めたものをどこに優先して使い、誰の負担を軽減するかを決める営みです。一方は国が負った債務を返済する仕事であり、一方は国の暮らしを均等に整える仕事です。すぐに票になる仕事でも、明日終わる仕事でもありませんが、長く国の方向性を定める問いです。

制服と電気料金は、その問いの中で巡り合います。

7月3日は選挙日から30日が経過した金曜日でした。その金曜日の夜の投稿をもって一週間が暮れ、釜山の夏は今まさに始まったばかりでした。議員の最初の夏が過ぎ去ったとき何が残るのか、その答えはまだ夏の中にありました。

エピローグ 百日後の問い

2026年7月3日

2026年7月3日金曜日の夜10時15分、韓東勲のフェイスブックに一つの文章が投稿されました。産業用電気料金を地域によって差をつけ、首都圏外の料金をより低く抑えようという主張でした。法律はすでに整っており先送りする理由はなく、他国でもすでに行われているのだから副作用を懸念する必要もない、と彼は記しました。遠目には請求書の数字の話に過ぎませんが、工場を繋ぎ止めなければならない都市においては、雇用が懸かった問題です。

彼が住所を置く釜山もまた、そうした都市の一つです。文章一つで料金表が変わるわけではありません。ただ、新しい議員の視線がどこを向いているのかを示しています。選挙が終わって三十日が過ぎた夜であり、3月26日から数えてちょうど100日目にあたる日でした。

100日の始まりには、党の外での時間がありました。1月29日、国民の力はかつて党を率いた人物を除名し、3月26日の彼はどの党にも所属しないまま春を過ごしていました。4月14日、万徳2洞行政福祉センターの窓口に一枚の転入届が置かれました。住所の一行が国の台帳に登録されたその日、彼は最後まで釜山北区で政治を行うと書き記しました。同じ日、自らを万徳の住民と呼ぶ投稿も行いました。

塩パンを手渡す隣人の手と、選挙を控えた引越しではないかという眼差しが、同じ路地に共存していました。5月15日、彼は無所属候補として登録しました。共に民主党のハ・ジョンウ候補、国民の力のパク・ミンシク候補と争う三人による勝負。党が与える公認も、共に走ってくれる組織もなしに戦う選挙でした。残されたのは、自身の体と言葉だけでした。

フェイスブックには日に数十件もの投稿が寄せられる日々が続き、路地で交わした挨拶がそのまま記録となって積み重なっていきました。

6月3日、投票箱が閉じられ、開票は夜を徹して行われました。開票が始まってからしばらくの間、彼の名前がリードすることはありませんでした。その数時間を、彼は息をひそめて見守っていたことでしょう。6月4日午前1時52分頃、彼の得票が初めてリードに転じました。その時の差は578票でした。万徳と亀浦と徳川から届いた投票箱が開けられる間の出来事でした。開票がすべて終わった時、差は1,392票、1.70パーセントポイントへと広がっていました。

最終集計は、韓東勲35,056票で42.96パーセント、ハ・ジョンウ33,664票で41.26パーセント、パク・ミンシク12,866票で15.76パーセントでした。

42.96パーセントは過半数に届かない数字です。彼が得た票は十のうち四に過ぎず、六近くは他の二人の候補者の名前の横に投じられました。1,392票は当選証書をもたらしたものの、過半数の支持までを与えてくれたわけではありませんでした。その明け方、同じ街の中で万歳とため息が交錯したはずです。35,056人の選択の傍らには、57パーセントの異なる選択が並んで存在していました。当選の挨拶を受ける者にとって、その数字は残された宿題でもあったはずです。

6月5日、彼は無所属議員として国会に初めて登院しました。6月22日には最初の法案を提出しました。選挙管理委員会を監査院の職務監察対象に含めようという監査院法改正案——1,392票の夜明けを渡ってきたばかりの人物が選んだ最初の法案でした。一票の重みを明け方の数字によって学んだ者にとって、選挙を管理する機関の仕事は他人事ではなかったはずです。言葉で口にしていた批判が、国会に提出する文書となりました。

7月になっても投稿が止まることはありませんでした。初日には、高校野球の試合で5・18光州民主化運動を揶揄の素材にしたことは誤りであるとしつつも、若い生徒たちに下された6ヶ月の出場停止処分は行き過ぎだと記しました。翌日には、いわゆる77法を巡り、自分のような政治家が受惠者になることを認めつつも、憲法と常識の問題であるとして反対すると記しました。そして3日目の夜、電気料金に関する文章が投稿されたのです。

国民の力に戻るのかという問いは、この100日の間に答えを得られませんでした。「民心の時計に合わせる」と語ったインタビューの言葉が、答えの代わりを果たしているに過ぎません。除名によって始まった100日は、復党を決めないまま閉じられました。

万徳2洞の窓口に置かれた転入届と、国会議員会館の机。その間にこの100日が存在します。机はソウル・汝矣島にあり、住所の一行は釜山北区万徳に記されています。住所を移した者は、住民となるのか、それとも候補者となるのか。春の窓口が残した問いに、100日は半分しか答えませんでした。彼は候補者となり、明け方の開票を経て議員となりました。「無所属」という四文字は、登院する日にも彼の名前の前に冠されていました。

しかし、住民となったのかどうかは、当選証書が答えてくれる問いではありません。「最後まで釜山北区で政治をする」という4月14日の約束は、いまようやく議員としての最初の三十日を過ぎたばかりであり、約束が守られるかを見守る隣人たちは万徳の路地に変わらず暮らしています。この記録は、100日目の夜の1つの投稿で止まります。議員となった者は、最後まで住民として残るのか。

ご支援のご案内

PayPal

本書を最後までお読みいただき、誠にありがとうございます。

金京鎮弁護士のAI書齋と知識プロジェクトは、公開オンライン書籍、翻訳本、講義資料を継続的に制作し、無料で共有する取り組みを続けています。

次の書籍や翻訳本を継続して提供できるよう、皆様のご支援をお願い申し上げます。

PayPalご支援: <https://paypal.me/kimkjkj>



<https://paypal.me/kimkjkj>